

浅川扇状地遺跡群

吉田四ツ屋遺跡（2）

—サーバス北長野駅レジデンス新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021年3月

長野市教育委員会



調査区遠景（航空撮影、東より）



SB13出土手埴形土器

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第160集として刊行いたします本書は、サーバス北長野駅レジデンス新築工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する吉田四ツ屋遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、弥生時代末～古墳時代前期、奈良時代～平安時代の堅穴住居跡等を検出したほか、手焙形土器を含む多量の土器が出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月





長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、「サーバス北長野駅レジデンス新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社吹穴工務店 信越支店 支店長 吉田真と、長野市長 加藤久雄 との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。委託事業名は以下のとおりである。
令和元年度：サーバス北長野駅レジデンス新築工事に伴う令和元年度埋蔵文化財発掘調査委託
令和2年度：サーバス北長野駅レジデンス新築工事に伴う令和2年度埋蔵文化財発掘調査委託
履行場所：長野市吉田四丁目1387番1 外
- 3 調査地は、長野県長野市吉田四丁目1387番1 外 に所在する。調査面積は613㎡である。
- 4 発掘調査は、令和元年7月4日から令和元年8月22日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は、調査終了後から令和2年度にかけて行った。
- 5 本書の編集は清水竜太が担当し篠井ちひろが補佐した。また執筆は清水竜太が担当した。
- 6 縄文土器の型式認定については、長野県埋蔵文化財センター 綿田弘実 氏にご教示を賜った。記して感謝申し上げます。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は、「AYTS」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴住居跡…SB、溝跡…SD、土坑…SK、性格不明遺構…SX
- 5 遺構実測図は、1/20で作成した原因をもとに、1/80を基本として掲載した。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原因をもとに土器1/4・土器断面1/3または1/4・土製品1/3・石器1/3または1/6で掲載した。掲載番号は、報告遺構ごとに通し番号を付した。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 遺構実測図において、は強い被熱面（硬化面）、は弱い被熱面の範囲を表す。
- 9 土器実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。また、器面のは赤色塗彩、は黒色処理の範囲を表す。
- 10 引用・参考文献は本文末にまとめて提示した。

目次

巻頭図版

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査の契機と事務経過	1
第2節 調査の経過と方法	2
第3節 調査体制	4
第2章 遺跡の立地と環境	5
第1節 遺跡の立地	5
第2節 周辺の遺跡	5
第3節 吉田四ツ屋遺跡の既往調査	7
第3章 調査成果	9
第1節 基本層序	9

第2節 調査概要	9
第3節 遺構と遺物	12
(1) 弥生時代末～古墳時代前期の遺構と遺物	
(2) 奈良時代～平安時代の遺構と遺物	
(3) 時期不明の遺構	
(4) 遺構外の遺物	

第4章 吉田四ツ屋遺跡出土の手焙形土器について

写真図版

報告書抄録

【挿図目次】

図1 調査地位位置図	1
図2 調査区位置図	2
図3 周辺遺跡位置図	6
図4 吉田四ツ屋遺跡調査区位置図	7
図5 吉田四ツ屋遺跡第一次調査地点遺構配置図	8
図6 基本層序	9
図7 遺構配置図	10
図8 SB12実測図	12
図9 SB12出土遺物実測図	12
図10 SB13実測図	13
図11 SB13出土遺物実測図	14
図12 SX1実測図	15
図13 SX1出土遺物実測図	16
図14 SD4実測図	16
図15 SD4出土遺物実測図	16
図16 SB1実測図	17
図17 SB1出土遺物実測図	17
図18 SB3実測図	17
図19 SB3出土遺物実測図	17
図20 SB4実測図	18
図21 SB4出土遺物実測図	18

図22 SB5実測図	19
図23 SB5出土遺物実測図	19
図24 SB6実測図	20
図25 SB6出土遺物実測図(1)	21
図26 SB6出土遺物実測図(2)	22
図27 SB7実測図	22
図28 SB7出土遺物実測図	22
図29 SB9実測図	23
図30 SB9出土遺物実測図	23
図31 SB10実測図	24
図32 SB10出土遺物実測図	24
図33 SB11実測図	25
図34 SB11出土遺物実測図	25
図35 SB15実測図	26
図36 SB15出土遺物実測図	26
図37 遺構外出土遺物実測図(1)	27
図38 遺構外出土遺物実測図(2)	28
図39 吉田四ツ屋遺跡出土の手焙形土器	34
図40 近江地域の手焙形土器	35
図41 長野県内出土の手焙形土器	36

【表目次】

表1 遺構一覧表	11
表2 土器観察表	29
表3 土製品観察表	32

表4 石器観察表	32
表5 編年対応表	36

【写真目次】

写真1 表土掘削(7月4日)	3
写真2 遺構映出(7月10日)	3
写真3 遺構掘削(8月8日)	3
写真4 遺構測量(7月19日)	3
写真5 長野放送の取材(7月31日)	3
写真6 長野市立長野高校の考古学実習(8月6日)	3
写真7 調査地南側の地形変化	9
写真8 SB13副切	13
写真9 SB13遺物出土状況	13

写真10 SX1遺物出土状況	15
写真11 SB5住穴内遺物出土状況	19
写真12 SB6カマド周辺遺物出土状況	20
写真13 SB6カマド内土器内部の灰の堆積	20
写真14 SB9遺物出土状況	23
写真15 SB9遺物出土状況	23
写真16 SB10カマド周辺遺物出土状況	24
写真17 A断面	34

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査の契機と事務経過

調査地は、長野市街地の北東部、しなの鉄道北長野駅から300m 東に位置する。調査地が所在する吉田地区は商業の町として早くから発展し、近年は大型商業施設の進出や再開発事業の実施、辰巳隧道の開通などによって生活の利便性が増したことで、高層集合住宅の計画・建設が相次いでいる。

起因事業の計画策定にかかる事前照会が事業主体者からもたらされたのは平成30年1月15日のことである。該当地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「浅川扇状地遺跡群」の範囲内であり、平成7年(1995)に発掘調査を行った「吉田四ツ屋遺跡」の調査地に近接することから、埋蔵文化財の保護に関する手続きが必要となる旨を伝えた。その後計画が具体化し、令和元年5月15日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出されたのを受け、同年5月20日付元理第2-52号にて発掘調査の保護措置を指示している。試掘調査は同年6月5日に実施し、開発区域内に設定した2箇所の試掘坑のいずれからも遺物包含層を確認した。これにより同年6月7日付で事業主体者から発掘調査依頼書が提出され、埋蔵文化財保護に関する協議を進めた結果、開発区域の2,303.26㎡を保護対象とし、うち埋蔵文化財に影響のある建物建設範囲616㎡を発掘調査対象として記録保存と目的とした発掘調査を行うこととなった。これに基づき、同年6月26日付で事業主体者との間で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」および「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

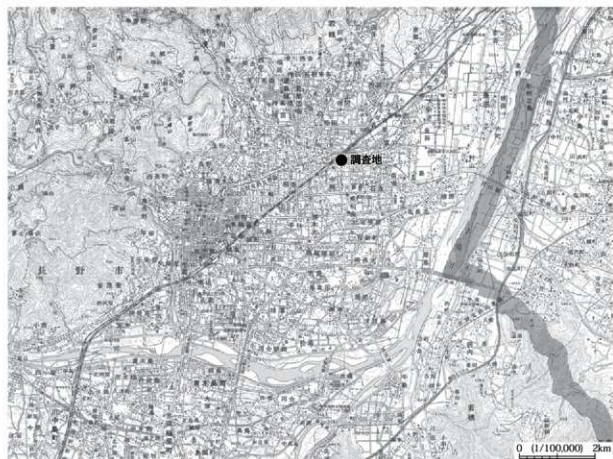


図 1 調査地位置図

現地における発掘調査は、7月4日から8月22日までの50日開行った。その後、令和2年3月6日付で委託契約の変更を行い、同月10日付で当該年度分の業務を完了し、実績報告書を提出した。発掘調査報告書作成のための整理作業は令和2年度に実施し、令和3年3月本書を刊行した。

第2節 調査の経過と方法

7月4日から16日まで、重機を援用した表土掘削を行った。遺構検出面までの深さは地表下1.3～1.4mと見込んでいたが、起回事業の工程上の都合で上～中位の上が事前に除去されており、作業開始時点での掘削対象は残りの約50cmであった。発掘作業員の雇用は8日から開始し、調査区壁面の清掃と排水側溝の掘削、および遺構検出を表土掘削と併行して行った。その結果、調査区中央部で複数遺構の重複が確認され、引き渡し期日までに調査が終了しない可能性が高まったことから、急速作業員を増員して17日から遺構掘削作業に着手した。調査においては複数のトレンチを設定して遺構の範囲・有無を確認したが、調査区南東側に包含層が残存していることが判明し、26日に再度重機を投入してこれを除去している。調査は8月22日まで行い、同日の発掘機材の撤収をもって現地作業を終了した。

調査記録のうち遺構測量は、掘削作業の進捗に合わせて、委託先の株式会社写真測図研究所に適宜依頼した。また記録写真は、個別遺構および調査区全景については35mm判フィルム一眼レフカメラを使用してモノクロネガフィルムおよびカラーズライドフィルムで撮影し、APS-Cサイズデジタル一眼レフカメラを補助的に併用した。また、ドローンを援用した航空撮影を8月19日に実施した。

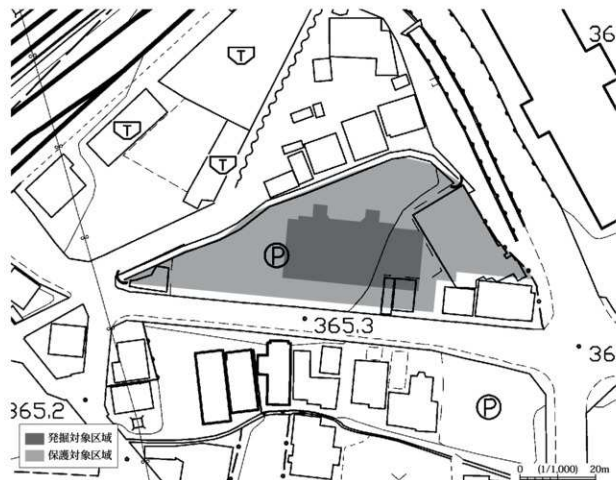


図2 調査区位置図

なお、事業主体者のご協力のもと、発掘現場において当センターの普及公開事業を2件実施した。一つは、長野放送の取材対応である。タレントの末吉くんの発掘調査体験を7月31日に撮影し、その様子が8月10日の「土曜はコレだねっ」で放映された。もう一つは長野市立長野高等学校の考古学実習受け入れである。2学年生徒4名が8月5日～7日の3日間現場作業を体験した。

整理作業については、出土土器の洗浄・注記・接合を現地作業終了後の10月から翌年3月にかけて実施し、令和2年度に遺物実測・図面整理・報告書編集を順次進め、令和3年3月4日の本書の刊行をもってすべての作業を終了した。



写真1 表土掘削 (7月4日)



写真2 遺構検出 (7月10日)



写真3 遺構掘削 (8月8日)



写真4 遺構測量 (7月19日)



写真5 長野放送の取材 (7月31日)



写真6 長野市立長野高校の考古学実習 (8月6日)

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
総括責任者		教育次長	竹内 裕治 (令和元年度) 樋口 圭一 (令和2年度)
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	小柳 仁彦
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長	石田 正路 (令和元年度)
		所長	大井 久幸 (令和2年度)
調査担当者	長野市教育委員会文化財課 (埋蔵文化財センター担当)	課長補佐	飯島 哲也
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	係長	小林 晴和
		事務職員	宮本 博夫、宮崎千鶴子 (令和元年度) 平林満美子 (令和2年度)
	調査担当	係長	風間 栄一
		主事	小林 和子
		研究員	清水 竜太 (主任調査員) 社本 有弥 (調査員、令和元年度) 田中 曉徳、遠藤恵実子、篠井ちひろ 小野 涼香、井出 靖夫 (令和2年度) 伊藤 愛 (令和2年度)
発掘調査員	向山 純子		
発掘補助員	後藤 大地		
発掘作業員	石坂 久子、稲田 新一、上原 律江、内田 正征、大谷 盛孝、大日方 孝 小林 信子、小林 英樹、坂田 渉、杉本 千代、高野 英雄、田原 次郎 玉井美千雄、中村 泰明、早川 壮幸、町田 未来、峯村 茂治、宮尾 弘子 宮川 誠一、宮沢 利忠、宮下 寿一、湯本 久美、渡辺 由美		
整理調査員	青木 善子、市川ちず子、鳥羽 徳子、武藤 信子		
整理作業員	飯島 早苗、清水さゆり、西尾 千枝、待井かおる、宮島 恵子、三好 明子		
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所		
重機等現物提供	株式会社穴吹工務店 信越支店		

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

吉田四ツ屋遺跡が所在する長野市は長野県の北部に位置する。長野市は周囲を山並みに囲まれ、古くから善光寺平と呼ばれる長野盆地とその東西の山地に市域を広げている。長野盆地は千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地を代表する盆地で、長さ約30km、幅約10kmの南西—北東方向に延びる紡錘形を呈する。西側の山麓線は、犀川・裾花川・浅川などの扇状地が大きな弧を連ねた単調な形状であるのに対し、東側は壮年期地形を呈する東部山地の山岳が盆地底から急激に突出し、山麓線は複雑に屈曲している。中央を縦貫する千曲川は、上流で供給された土砂をその流路に堆積させ、標高330～360mの平坦な千曲川氾濫原を形成しているが、盆地床の大部分は東西の山地から流れ出た中小河川の扇状地で構成されている。

こうした地形状況のうち、吉田四ツ屋遺跡は長野盆地の北西部を占める浅川扇状地上に立地している。浅川扇状地は、市域北部の飯綱山(1.917m)を水源とする浅川の堆積作用により形成された扇状地で、標高500mの浅川東条を扇頂に扇状地面を南東へ広げ、南は城東・西和田で裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫原に接している。調査地は、扇頂から3.5km南東の扇中央から扇端への移行部に位置し、標高は約365mである。

第2節 周辺の遺跡

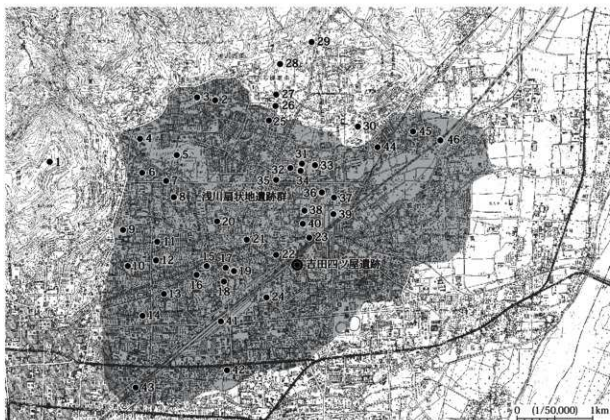
市内有数の遺跡密集地である浅川扇状地は、その全様が「浅川扇状地遺跡群」として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録され、これまで多くの発掘調査が行われている(図3)。本節では、浅川扇状地に隣接する遺跡も含めてそれらのうち代表的なものを時期ごとに概観していく。各遺跡の詳細な内容については、調査機関である長野市教育委員会および長野県埋蔵文化財センターから刊行された報告書を参照されたい。

縄文時代の遺跡は、扇状地扇頂部から扇中央にあたる浅川地区・若槻地区・吉田地区の浅川沿いに点在している。松ノ木田遺跡(4)は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時期を代表する遺跡である。前期後葉の遺構では、球状耳飾とその破片、破片を加工した垂飾品と勾玉およびその未製品が30点余り出土し、球状耳飾を転用した石製装身具類の生産が行われていたと考えられている。

扇状地の本格的な開発は弥生時代に始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など、扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。権田遺跡(5)では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半が栗林式土器編年における最古段階に位置づけられ、同時期の浅川端遺跡(7)・牟礼バイパスD地点遺跡(29)に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、竊床木棺墓を含む9基の木棺墓群が居住域に隣接して検出され、当時の集落構造の一端が明らかになった。後期後半においては在土器と共に多くの北陸系土器が出土した。同様の事象は本村東沖遺跡(9)・長野女子高校校庭遺跡(12)などでもみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末～古墳時代初頭に先んじる共伴事例として評価される。後期前半吉田式土器の標式遺跡として著名な吉田高校グラウンド遺跡(20)では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏃が出土した。該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。なお扇頂部の迎田遺跡(25)や扇端部の国鉄車両基地遺跡(41、笹澤1970)では、長野市内でも出土例の少ない中期前半の土器が見つかっている。

古墳時代になると、それまで遺跡が希薄であった扇中央部の桐原地区や扇端部の平林地区でも分布が認められる

ようになる。弥生時代末～古墳時代前期の集落遺跡はいずれも検出住居数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡(16)・桐原宮北遺跡(17)・桐原牧野遺跡(18)・吉田四ツ屋遺跡・吉田古屋敷遺跡(22)で方形周溝墓が見つかっている。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落とみられ、石製模造品の製作工房を含む56軒の住居跡が検出されたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土した。集落の存続期間から、地附山古墳群(1)の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡



No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古墳	中世	報告書番号
	吉田四ツ屋遺跡	集落跡	○	○	○	○	75
1	地附山古墳群(7基)	古墳	○	○	○	○	50
2	浅川西条遺跡	集落跡	○	○	○	○	12
3	小坂屋遺跡	集落跡	○	○	○	○	94
4	松ノ本田遺跡	集落跡	○	○	○	○	77・82
5	檀田遺跡	集落跡	○	○	○	○	41・105
6	長谷末古墳群(7基)	古墳	○	○	○	○	10
7	浅川端遺跡	集落跡	○	○	○	○	29・102・122
8	柳屋遺跡	集落跡	○	○	○	○	41・136
9	本村東沖遺跡	集落跡	△	○	○	○	50・67・111
10	本村東沖遺跡	集落跡	△	○	○	○	66113
11	下字本遺跡	集落跡	○	○	○	○	58
12	吉野女子高校校庭遺跡	集落跡	○	○	△	○	134
13	二輪遺跡	集落跡	○	○	○	○	15・19・38・45・100・151
14	本郷池遺跡	集落跡	○	○	○	○	103・150
15	桐原宮西遺跡	集落跡	○	○	○	○	108
16	高日遺跡	集落跡	△	○	○	○	108
17	桐原宮北遺跡	集落跡	○	○	○	○	130
18	桐原牧野遺跡	集落跡	○	○	○	○	143・145
19	柳屋宮(高野式部跡)	城館跡	○	○	○	○	145
20	吉田高校グラウンド遺跡	集落跡	○	○	○	○	222・97
21	吉田町東遺跡	集落跡	△	○	○	○	71・112・126・152
22	吉田古屋敷遺跡	集落跡	○	○	○	○	84・108・118・119・120
23	扇川池遺跡	散布地	○	○	○	○	103
24	中坂遺跡	集落跡	○	○	○	○	146・148
25	渡田遺跡	散布地	○	△	○	○	13
26	津丸バイパスA地帯遺跡	集落跡	○	○	○	○	12
27	津丸バイパスB地帯遺跡	集落跡	○	○	○	○	17・65
28	津丸バイパスC地帯遺跡	集落跡	○	○	○	○	17
29	津丸バイパスD地帯遺跡	集落跡	○	○	○	○	17
30	徳間本堂跡	集落跡	△	○	○	○	69・139
31	徳間寺地帯遺跡	散布地	○	○	○	○	144・148
32	徳間柳田遺跡	集落跡	○	○	○	○	99
33	徳間柳田遺跡	集落跡	○	○	○	○	9・47
34	徳間中津遺跡	散布地	○	○	○	○	144
35	扇川池遺跡	集落跡	○	○	○	○	47
36	本郷池遺跡	集落跡	○	○	○	○	47
37	二ツ宮遺跡	集落跡	○	○	○	○	47・71・122
38	大塚本遺跡	集落跡	○	○	○	○	104
39	徳間寺遺跡	集落跡	○	○	○	○	104・108
40	扇川池遺跡	集落跡	○	○	○	○	104
41	回鉄寺岡基壇遺跡	散布地	△	△	△	△	
42	平林東沖遺跡	集落跡	○	○	○	○	116・138
43	東沢町遺跡	散布地	○	○	○	○	6654
44	駒沢新町遺跡	集落跡	○	○	○	○	10・55・126
45	上長畑遺跡	集落跡	○	○	○	○	111
46	駒沢城跡	城館跡	○	○	○	○	76・127

・ブツク体で表記した遺跡は浅川扇状地遺跡群に含まない。
 ○は遺構・遺物の確認、△は遺物のみの確認を示す。
 ・報告書番号のうち、「扇」を冠したものは長野県埋蔵文化財センター発行の報告書を示す。

図3 周辺遺跡位置図

(44)は、5箇所の祭祀遺構が確認され、駒沢祭祀遺跡として一部が県史跡に指定されている。このうち1号祭祀遺構では、総数500個体を超える多量の土師器と共に、900点を数える白玉や石製模造品・鉄鏃・ガラス小玉などが出土した。後期は、90軒の住居跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群(6)は6世紀末頃構築された7基の円墳からなる古墳群で、現在は2号墳のみが残されている。

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に扇状地北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇状部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物に、本堀遺跡(36)・牟礼バイパスC地点遺跡(28)・同D地点遺跡(29)の7世紀代に遡る軒瓦や稲添遺跡(35)の平安時代の瓦塔などの仏教関連遺物、桐原宮北遺跡(17)の後椀・双耳杯・円面硯などの官衙関連遺物がある。

中世は、各集落遺跡で見つっている遺構・遺物のほか、15箇所の城館跡が知られる。発掘調査が実施されたのは駒沢城跡(46)と桐原要害(高野氏館跡)(19)の2箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や欄列・掘立柱建物などが検出されている。

第3節 吉田四ツ屋遺跡の既往調査

吉田四ツ屋遺跡は、しなの鉄道北長野駅の東に位置する字四ツ屋地籍に所在する。民間マンションのグランドハイツ北長野の建設工事に先立ち、長野市教育委員会によって平成7年(1995)に最初の発掘調査が実施された(長野市教育委員会1996、以下、第一次調査)。調査地は、本書の調査地の南西約150mに位置する(図4)。遺構検出面は2面あり、上層の1次面において奈良～平安時代の住居跡6軒・溝跡5条、下層の2次面において縄文時代後期の住居跡2軒、弥生時代中期の住居跡4軒、同後期の住居跡2軒・土器棺墓1基、古墳時代前期の住居跡2軒・墳丘墓2基などを検出した(図5)。

縄文時代住居跡のSB15は、掘り込みは検出されなかったものの、柱穴や配石を伴うことから柄鏡形の敷石住居と考えられる。弥生時代中期の住居跡はいずれも平面形が円形を呈し、出土土器の様相から栗林式でも古い段

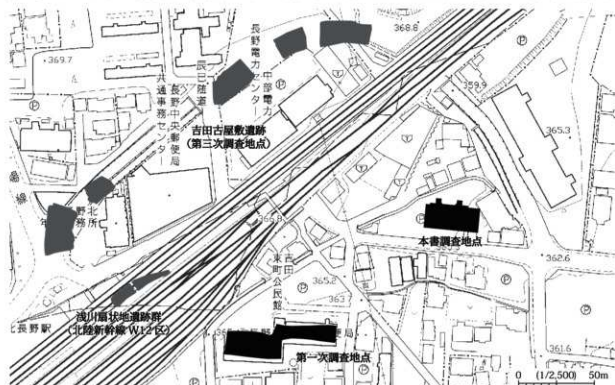


図4 吉田四ツ屋遺跡調査区位置図

階に属する。古墳時代前期前半の墳丘墓 SZ1は、大半が調査区外となり埋葬主体部も確認されていないが、前方後方形周溝墓とみられる。後方部北隅にあたる周溝の底面から、一括廃棄された多数の土器が出土した。またこれに後続する前期後半の墳丘墓 SZ2では、長野盆地において数少ない該期の壺形埴輪が出土している。

吉田四ツ屋遺跡が所在する北長野駅周辺は、駅前の再開発、民間マンションの建設、鉄道・道路の路線改良などに伴い、浅川扇状地にあつて特に多くの発掘調査が行われている地域である。吉田四ツ屋遺跡の直近では、本書の調査地点から北西約150mで吉田古屋敷遺跡の第三次調査（長野市教育委員会2007）、西約250mで北陸新幹線建設に伴う浅川扇状地遺跡群の調査（長野県埋蔵文化財センター1998）が行われ（図4）、特に吉田古屋敷遺跡第三次調査の北東寄り3調査区の成果が目される。これらの調査区では、縄文時代後期の敷石住居・古墳時代前期の方形周溝墓を含む、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の各時期からなる遺構群を検出しており、吉田四ツ屋遺跡第一次調査地点の検出遺構と共通する様相を呈している。地形なども考慮すれば、両調査地点・調査区に本書の調査地点を加えた範囲は、おそらく同一の集落域として把握できるとと思われる。北長野駅周辺は調査地の所在する字名に基づいて遺跡が命名・区分されているが、各調査地点の間には不可分の関係が想定され、遺跡の境界（=字界）がそのまま遺構分布範囲の境界とならないことに注意が必要である。

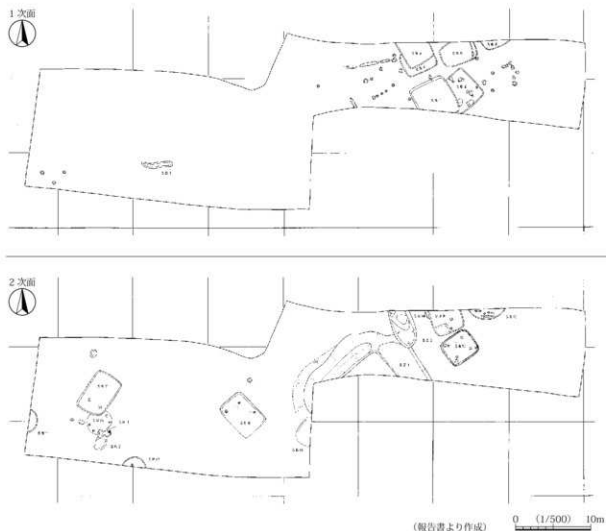


図5 吉田四ツ屋遺跡第一次調査地点遺構配置図

第三章 調査成果

第1節 基本層序

調査区四隅の壁面で観察した土層堆積に基づき、本調査地の基本層序としてⅠ層～Ⅷ層を設定した(図6)。人為的な造成土のⅠ層を除いたⅡ層からⅧ層が自然堆積層であり、Ⅲ層・Ⅳ層がSD2の覆土、Ⅵ層が遺物包含層、Ⅷ層以下が地山層となる。Ⅳ層は調査区南東部に広範囲に堆積し、SD2の覆土としてⅥ層とⅦ層を切ってⅧ層まで達している。遺構検出面としたⅥ層直下、すなわちⅧ層もしくはⅧ層上面の高さをそれぞれの箇所と比較すると、北西から北東に76cm、南西から南東に101cm、北西から南西に4cm、北東から南東に30cmそれぞれ低く、調査地は東へ大きく下る南東向きの斜面地であるのがわかる。調査地の南側と東側で現地形の下り勾配が増しており(写真7)、包含層の層厚が南東方向に薄くなっていることを考え併せれば、調査地を南東限として遺構分布が希薄化していくことが予想される。

第2節 調査概要

検出した遺構は、弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居跡2軒・溝跡1条・性格不明遺構1基、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡10軒、時期不明の竪穴住居跡1軒・溝跡3条・土坑9基・被然面などである(図7・表1)。調査区中央を縦貫するSD2の西側に遺構が密集して分布しているのは、前節で述べた調査地の地形条件に規制され、より高所な西側が生活の場として積極的に選地されたためだろう。なお、調査着手前に想定していたよりも地形の傾斜が大きく、重機による表土掘削の段階で西側では掘削過剰、東側では掘削不足となった箇所が生じた。後者については重機による再掘削やトレンチの設定により遺構の有無の確認に努めたが、前者についてはいくつかの遺構を

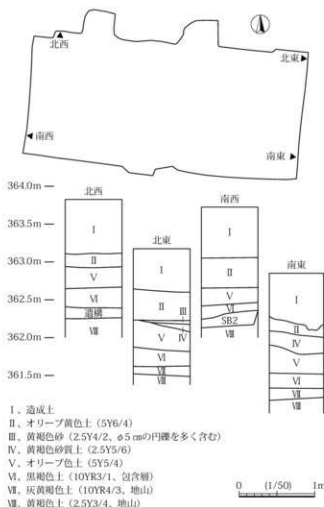


図6 基本層序



写真7 調査地南側の地形変化

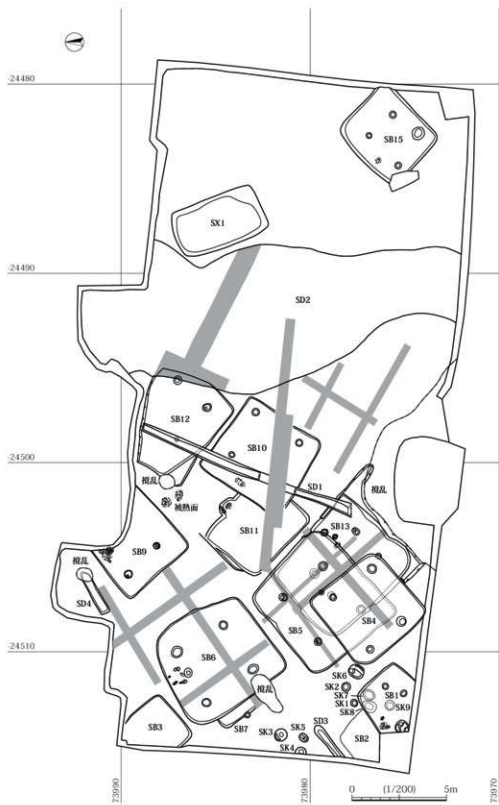


図7 遺構配置図

すき取ってしまったことが基本層序の確認作業で判明している。

土器は堅穴住居跡を主体に206.3kg出土した。ただ全体的に接合率が悪く、全形が復元できた資料は少ない。これらの中には、遺構のない縄文時代後期前半・弥生時代中期後半・同後期前半、そしておそらくは弥生時代後期後半の土器も一定量入っている。該期の遺構が調査地や近接地に存在することを示唆するものと言えよう。遺構内からは複数時期にまたがって土器が出土し、時期判断を躊躇する場面が多々あった。

特記事項として、弥生時代末～古墳時代初頭のSB13から祭祀具と考えられる手焙形土器が出土したことが挙げられる。先細の施文具により施文された覆部の破片で、これと似た土器片がSB12・13や遺構外から4点見つかっている。類似土器が2～3個体の破片とすれば、本遺跡では最低3個体の手焙形土器が存在したことになる。

表1 遺構一覧表

遺構名	時期	平面形	規模	付帯施設	備考
SB1	奈良	隅丸長方形	平面：長軸(3.35m)×短軸3.15m、壁高：24cm	カマド(北西)	SB2と重複
SB2	不明	不明	平面：(2.56m)×(1.95m)		SB1と重複
SB3	奈良	隅丸長方形	平面：長軸(3.06m)×短軸2.98m、壁高：13cm		
SB4	奈良～平安	隅丸方形	平面：4.67m×4.64m、壁高：22cm	主柱穴(4/4)	
SB5	奈良	隅丸方形	平面：6.18m×5.55m、壁高：24cm	主柱穴(4/4)	SB4に切られる
SB6	奈良	隅丸長方形	平面：5.92m×5.53m、壁高：24cm	カマド(北西)・主柱穴(4/4)	
SB7	奈良	不明	平面：(2.04m)×(0.69m)、壁高：24cm		SB6に切られる
SB8					欠番
SB9	奈良	隅丸方形	平面：4.35m×(4.13m)、壁高：22cm	カマド(北西)・主柱穴(2/4)	
SB10	奈良	隅丸方形	平面：4.97m×4.68m、壁高：14cm	カマド(北西)・主柱穴(3/4)	SD1・SB11に切られる
SB11	平安	隅丸方形	平面：3.78m×4.45m、壁高：17cm	カマド(北東)	
SB12	弥生末～古墳初頭	不整隅丸長方形	平面：長軸5.62m×短軸4.38m、壁高：34cm	主柱穴(2/4)	SD1・2に切られる手焙形土器
SB13	弥生末～古墳初頭	隅丸長方形	平面：長軸6.30m×短軸5.34m、壁高：60cm	主祭・副祭3・主柱穴(4/4)	SB4・5に切られる手焙形土器
SB15	平安	隅丸長方形	平面：長軸4.29m×短軸3.83m、壁高：32cm	カマド(北西)・主柱穴(4/4)	
SX1	古墳前期	隅丸長方形	平面：長軸4.85m×短軸2.73m、深さ：43m		SK14から改称
SK1	不明	円形	平面：0.39m×0.36m、深さ：11cm		SP1から改称
SK2	不明	円形	平面：0.45m×0.45m、深さ：8cm		SP2から改称
SK3	不明	円形	平面：0.69m×0.63m、深さ：34cm		SP3から改称
SK4	不明	円形	平面：0.48m×(0.36m)、深さ：22cm		SP4から改称
SK5	不明	楕円形	平面：0.51m×0.37m、深さ：16cm		SP5から改称
SK6	不明	楕円形	平面：0.82m×0.67m、深さ：32cm		SP6から改称
SK7	不明	楕円形	平面：0.66m×0.53m、深さ：15cm		SB1K2から改称
SK8	不明	楕円形	平面：0.77m×0.59m、深さ：14cm		SB1K3から改称
SK9	不明	円形	平面：0.54m×0.54m、深さ：7cm		SB1K4から改称
SD1	不明	-	平面：長さ(24.46m)×幅0.59m、深さ：32cm		
SD2	不明	-	平面：長さ(11.94m)×幅7.89m、深さ：39cm		
SD3	不明	-	平面：長さ2.10m×幅0.49m、深さ：14cm		
SD4	古墳前期	-	平面：長さ2.52m×幅0.58m、深さ：36cm		
被熱面	不明	-			2箇所が併存

第3節 遺構と遺物

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の遺構と遺物

SB12

調査区中央部の北端で検出した不整隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。北側が調査区外にあり、また東側が時期不明のSD2に削平されているため、確認できたのは北西辺～南東辺と北東辺の一部に囲まれた全体の2/3程度である。検出規模は、長軸5.62m、短軸4.38m、最大壁高34cmを測る。なお西側の張り出し部分は、床面よりも高い位置で地山が検出された範囲であり、別遺構もしくは基本層序Ⅷ層の遺存範囲である。

床面は不明瞭で、硬化面や地床炉は認められない。柱穴は3箇所確認した。南東にやや偏るが、4主柱のうち3本分とみられ、排水のために残した畦の下に残りの1本分が存在すると考えられる。

出土土器の総量は12.9kgあり、このうち壺(1・2・8)、甕(3・4)、高杯(5・6)、手培形土器(7)、円盤形土製品(9)を図示した。1は箱清水系の系譜を引き、大きく開いた口縁部の内側に短く立ち上がって外反するもう一つの口縁部を重ねる。内外面は赤色塗彩される。8は肩部付近の破片で、2条の浅い櫛描波状文の間に窠描きの短斜線文を羽状に7段重畳する。東海東部の壺の模倣品と思われる。3・4は台付甕の脚部とみられる。体部の形状は不明ながら、外來系と判断される。5は北陸系の有稜高杯で、内外面とも赤色塗彩される。7は、平行する2本の直線とその間を充填する斜線が細い線刻により描かれる。SB13出土の手培形土器(図11-16)と文様構成が酷似し、小片ながら手培形土器の一部と判断した。色調や器面の質感がSB13出土のものとは異なり、別個体とみられる。なお、未実測資料中には櫛描文や赤色塗彩を施した在外系の破片も含むが、

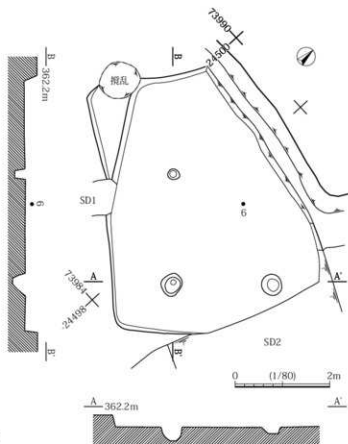


図8 SB12実測図

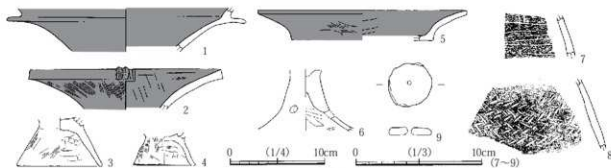


図9 SB12出土遺物実測図

出土土器に占める割合は多くない。

以上より、本遺構は弥生時代末～古墳時代初頭の所産と判断される。

SB13

調査区中央部の南寄りで見出した隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。奈良時代のSB4・5、時期不明のSD1に切られるものの、掘り込みが床面まで達していないため全体の把握が可能である。検出規模は、長軸6.30m、短軸5.34m、最大壁高60cmを測る。ただ、大規模な攪乱と干渉する南東部はプランの認定が不確実であり、長軸方向の長さは若干前後する可能性がある。また壁高については、南東辺を共有するかのようにななるSB5の検出面から計測した値を示しているため、本来の残存高よりも高い数値となっている可能性もある。

本住居の床面は地山をそのまま利用したもので、北西から南東へ向かってわずかな下り勾配を有する。中央部を中心に硬化が認められるが、床面検出高を前後して湧水が始まり、範囲の特定が困難であった。柱穴は、床面中央に寄った位置から4箇所確認した。主柱

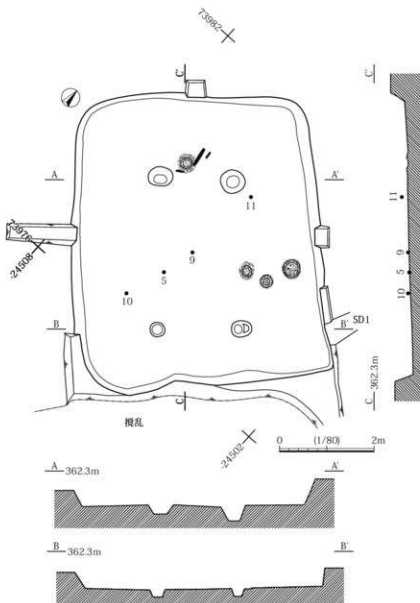


図10 SB13実測図



写真8 SB13副炉



写真9 SB13遺物出土状況

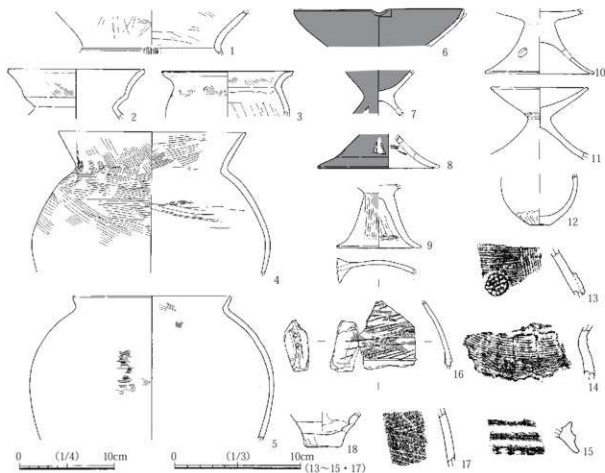


図11 SB13遺物実測図

穴とみられる。炉は、北西側主柱穴間で主炉を1箇所、北東側主柱穴間で副炉を3箇所検出した。炭で広く覆われた状態で検出され、主炉の周りには炭化材も若干認められる。いずれも地山を皿状に掘りくぼめた地床炉で、主炉および西の副炉は強い火熱を受けて内部が硬化している。

出土土器の総量は16.9kgあり、このうち壺(1・2・13・15)、甕(3~5・14)、高杯(6~10)、器台(11)、鉢(12)、手焙形土器(16・17)、ミニチュア土器(18)を図示した。いずれも部分的な遺存状態で、全形のわかる個体はない。1は箱清水式の系譜を引き、「く」字に屈曲する頸部にT字文を施す。赤色塗彩はない。2は有段口縁で、段部は緩やかに屈曲する。口縁端部は面取りされる。北陸系であろう。13はT字文の上に刺突を施した円形浮文を付加する。箱清水式の系譜を引くが、肩部の張りが弱く、弥生時代後期に遡る可能性もある。3~5は外面ハケメ調整で頸部が「く」字に屈曲する甕である。3は口唇部が面取りされ、内面にケズリ調整を施す。北陸系である。頸部内面に帯状に赤色顔料が付着しており、調理以外の用途で使われていた可能性がある。5は胴部径に対して口径が小さく、口縁部の立ち上がりが短い。内面にミガキ調整を施すのは在来系の調整手法だろう。箱清水系の14は頸部内面にわずかな稜線を有する。6~8は箱清水式の系譜を引く低脚の小型品である。脚部には三角形透かし孔を配する。6の口縁部には注ぎ口が設けられる。11は東海系の小型器台で、器受部は緩やかに内湾し、端部をわずかにつまみ出す。脚部の遺存範囲内に透かし孔は認められない。12は丸みをおびた体部に小径の底部を持つ。体部下半にはケズリ調整が施される。外来系の鉢か。16は、覆部右側面の破片で開口部の端部は両面から粘土を貼り付けて断面三角形の面をなす。外面は斜線文が細い線刻により多段に施される。手焙形土器については、他の出土例も含めて第IV章で詳しく検討する。

以上見てきた遺構・遺物の様相より、本遺構は弥生時代末～古墳時代初頭に帰属すると考えられる。

SX 1

調査区中央部のやや北寄りで検出した隅丸長方形を呈する掘り込みである。他遺構との重複関係はない。検出規模は、長軸4.85m、短軸2.73m、深さ43cmを測る。

本遺構は調査時に堅穴住居跡(SB14)としていたが、柱穴や炉などの付帯施設が見られないこと、長軸に対して短軸の長さがかなり短いこと、壁面の斜度が緩やかなことなど、住居跡としては不自然な点が多く認められるため、性格不明遺構として報告することとした。南東隅には焼土が厚く堆積しており、本遺構の性格と関連する可能性がある。

出土遺物の重量は25.4kgを量り、本調査で検出した遺構の中ではSB6に次いで多い。このうち図示したのは、壺(1・2)、甕(3・4・19)、高杯(5～7)、鉢(8～11)、小型丸底壺(12)、器台(13～18)である。1は箱清水系で、大きく開く口縁部の内側にさらに口縁部を重ねる。2は、細く短い頸部から口縁部が大きく開く東海系の壺で、段を2箇所に設ける。内外面ともミガキ調整が施され、赤色塗彩や施文は認められない。3・4は「く」字口縁を有する。4の口縁端部は面取りされており北陸系である。4の口縁部は横ナデにより上部が下部に比べて強く外反する。5～7はいずれも北陸系であるが、脚部の6・7については器台となる可能性もある。8～10はいわゆる屈曲鉢である。全形が把握できる8は、平底で、腕型の胴部から明瞭な屈曲部を経て口縁部が外反して開く。地色は橙色であるが、部分的に明黄褐色を呈する化粧土が残る。口径18.5cm、器高8.3cmを測る大型品である。13は装飾器台の器受部である。中に円形の透かし孔を等間隔に8箇所穿つ。蓋部は鐮状に張り出さず有段状をなす。14は鼓状を呈する大型の器台で完形である。底径が口径に比べてわずかに大きいもののほぼ上下対称形をなす。粗雑な作りであるが、ほぼ全面に化粧土が施され、器表面は平滑に仕上げられている。15は浅い腕型の器受部と内湾して大きく開く脚部を持つ。器受部端部は上部につまみ上げて先細りとなり、外面は広い面をなす。内外面とも縦方向のミガキ調整が施される。

図示した土器は、弥生時代末～古墳時代初頭に属する1～3・5～7・19と、古墳時代前期に属する4・8～18に時的に二分される。未実測資料を含めれば、古墳時代前期の土器の方が量的に勝っており、また完形品を含めて遺存率の高い個体が多いことから、本遺構の所属時期は古墳時代前期と考えられる。

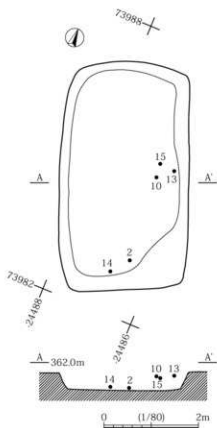


図12 SX 1実測図



写真10 SX 1遺物出土状況

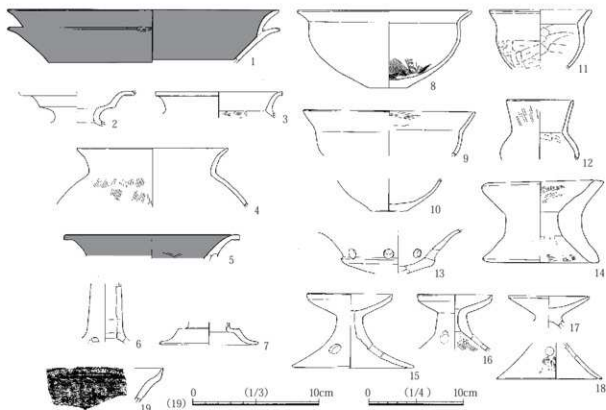


図13 SX 1 出土遺物実測図

SD 4

調査区北西部で検出した南西—北東方向に延びる溝跡である。北東端の上部が現代の擾乱により削平されている。検出規模は長さ2.52m、幅0.58m、深さ36cmを測る。

出土遺物は土師器の鉢（1）を図示した。丸底で半球を呈する胴部から短い口縁部が緩やかに外反する。小型の屈曲鉢と思われる。

出土遺物より古墳時代前期の所産と考えられる。

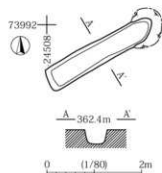


図14 SD 4 実測図

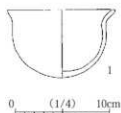


図15 SD 4 出土遺物実測図

(2) 奈良時代～平安時代の遺構と遺物

SB 1

調査区南西隅で検出した隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。西側は後世の擾乱により削平され、南側は調査区外となる。時期不明のSB 2と重複関係にあるが、SB 2は床面の範囲を検出したにすぎず、先後関係は明確でない。検出規模は、カマドのある北西—南東軸が3.15m、これに直交する北東—南西軸の残存長が3.35m、壁高は最大24cmを測る。

床面は地山混じり灰褐色土の貼床を施すが顕著な硬化は認められない。小穴は2箇所を検出したが、位置的にみて柱穴ではないと思われる。カマドは北西壁で火床・左軸石材1個・右軸石材設置痕1箇所を検出した。想定される平面プランからすれば、壁面の中央から若干南西寄りに構築されていたと考えられる。カマド南側で検出

された土坑は、貼床下層にあった別遺構を先行して検出・掘削したものと思われる。

出土遺物の総量は約4.9kgあり、このうち須恵器の有台杯(1)、土師器の杯(2)・鉢? (3~5)を図示した。2はカキメ状の深い擦痕を残す横ナデを内面から外面にかけて施し、体部中ほどにケズリ調整によって「く」字形の屈曲部を作り出す。類例を見ない形態であるが、屈曲部の上部に低い段差を形作っていることから、古墳時代の須恵器杯蓋模倣杯の系譜を引く可能性がある。3・4は鉢形を呈するが、混和剤を多量を含む粗雑な作りで、外面には強い被熱痕が認められ、火にかけて使用されたとみられる。外面をケズリ、内面をイタナデで仕上げる。5は4と同一個体の可能性がある。図化した遺物以外に、カマド周辺から外面にケズリ調整、内面にハケム調整を施す長胴甕が複数個体分出土している。

以上より、本遺構の所属時期は奈良時代と考えられる。

SB3

調査区北西隅で検出した。他遺構との切り合

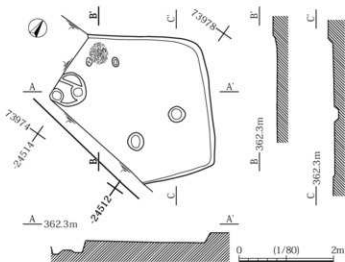


図16 SB1実測図

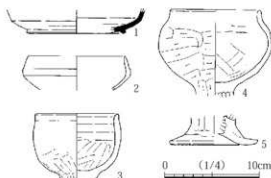


図17 SB1出土遺物実測図

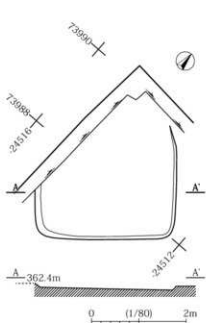


図18 SB3実測図

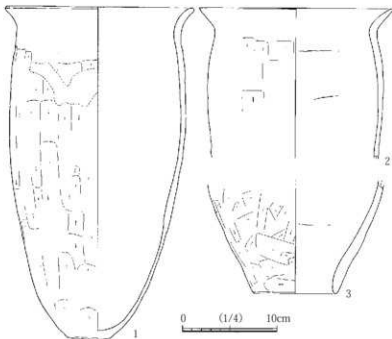


図19 SB3出土遺物実測図

い関係はないものの、北側と西側が調査区外となり全形は検出できていない。平面形は、北西—南東方向に長軸を向ける隅丸長方形と思われる。検出規模は、北西—南東軸の残存長が3.05m、北東—南西軸が2.98m、最大壁高は13cmを測る。

床面は覆土下の地山混じり灰褐色土を貼床とみなしたが、湧水が著しく、硬化の有無は確認できていない。柱穴・火処は見つかっていない。他の壁穴住居跡と比べてイレギュラーな平面形態であり、通常の居住施設以外の用途があった可能性がある。

出土遺物の総量は約4.5kgあり、このうち土師器の甕(1・2)・甔(3)を図示した。1は口径19.5cm、器高35.3cm、底径4.5cmを測る長胴甕である。胴部最大径は口径よりもわずかに小さく、肩部の張りは弱い。外面をケズリ、内面をイタナデで仕上げる。3は底部全面を蒸気孔とする。1/3ほど残存する蒸気孔の端部にスノコ渡しの孔は認められない。

以上より、本遺構の所属時期は奈良時代と考えられる。

SB 4

調査区西部の南端で検出した一辺約4.6mの隅丸方形を呈する壁穴住居跡である。奈良時代のSB5、弥生時代末—古墳時代初頭のSB13を切って構築される。壁高は最大22cmを測る。

床面は柱穴を検出した段階をもって設定したもので、貼床や硬化面が認められず、全体的に脆弱である。主柱穴は4箇所、南西壁と北東壁に寄せて配置され、深さは15—25cmとばらつきがある。火処は認められなかった。

出土土器の総量は約10.9kgあり、このうち土師器の杯(1)・甕(3・4)・羽釜(5)、須恵器の杯(6)・長頸壺(2)、不明土製品(7)を図示した。1は椀状を呈し、内面に横方向のミガキ調整、外面下部にケズリ調整を施す。3・4はいずれもロクロ成形で、4の内面にはカキメが施される。5は時期が下る混入品だろう。6は有台杯の底部外面の中央に「×」を線刻する。7は断面楕円形の棒

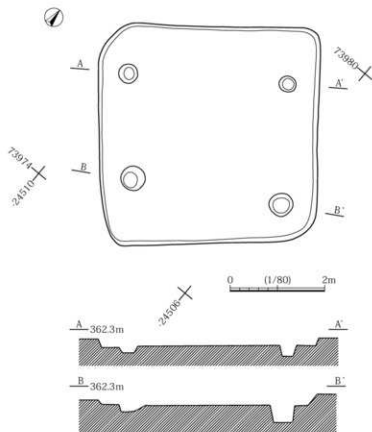


図20 SB 4実測図

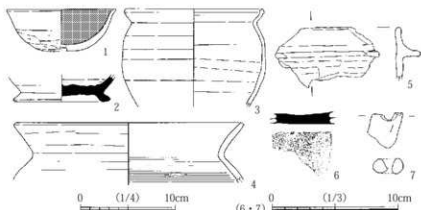


図21 SB 4出土遺物実測図

状を呈する土製品の破片で、一方に円孔が認められる。用途や時期は不明である。

出土遺物より、本遺構の所属時期は奈良時代～平安時代初頭と考えられる。

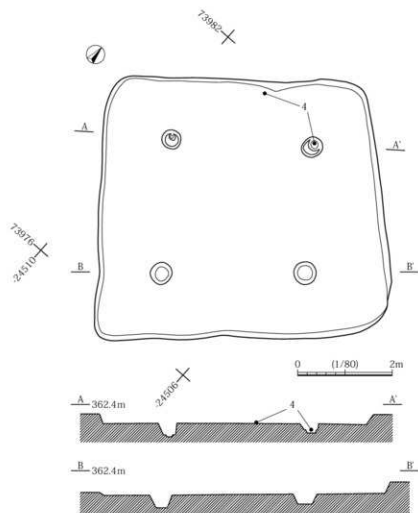


図22 SB 5 実測図

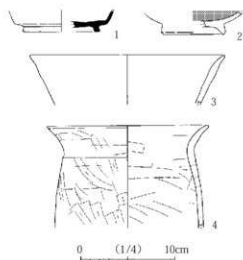


図23 SB 5 出土遺物実測図

SB 5

調査区西部で検出した竪穴住居跡である。SB 4に切られるものの、床面まで掘り込みが達していないため、全形が把握できた。平面形は概ね隅丸方形を呈するが、SB13と重複する北東側の壁面を本来の位置より掘り過ぎてしまい、東隅が北東に寄っている。検出規模は、北東-南西軸で6.18m、北西-南東軸で5.55mを測るが、本来の形状であれば前者は後者と同程度であったと考えられる。

床面は地山混じり灰褐色土の粘床が施されるものの、硬化面は顕著でない。主柱穴は4箇所で求心的に配置される。カマドは見つかっていないが、長胴甕(図23-4)を検出した北東壁中央に構築されていたものと推測される。

出土土器の総量は約9.3kgあり、このうち須恵器の有台杯(1)、土師器の椀(2)・鍋?(3)・甕(4)を図示した。2はロクロ成形で、内面に黒色処理を施す。時期の下る混入品だろう。3は体部



写真11 SB 5 柱穴内遺物出土状況

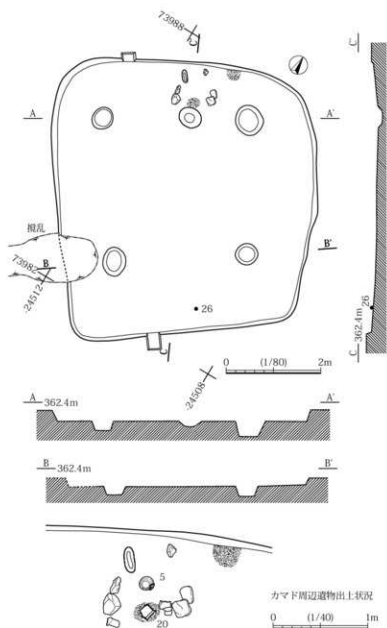


図24 SB 6実測図

が直線的に外傾し、口唇部をわずかに外反させる。鍋様の形態が予想され、多量の混和剤、外面の強い被熱痕から、火にかけて使用されたと考えられる。4はカマド想定位置から出土した口縁部と北側柱穴から検出した口縁部～胴部が接合した。外面をケズリ、内面をイタナデで調整する。

以上より、本遺構は奈良時代の所産と考えられる。

SB 6

調査区西部の北寄りで検出した竪穴住居跡である。SB 7を切って構築される。南西側の一部が掘乱により削平されているものの、ほぼ全形が検出できた。平面形は隅丸長方形を呈し、カマドのある北西-南東方向に長軸を向ける。北隅から北東辺にかけては、遺構内外の土質差が不明確であったため、他辺に比べて歪な形状をなす。検出規模は、北西-南東軸が5.92m、これに直行する北東-南西軸が5.53m、最大壁高が24cmを測る。

床面には貼床が施されている。硬化面は認められない。主柱穴は4箇所である。カマドは、北西壁のやや北東寄りに構築され、火床・袖を検出した。火床の被熱は弱く硬化は認められない。



写真12 SB 6カマド周辺遺物出土状況



写真13 SB 6カマド内土器内部の灰の堆積

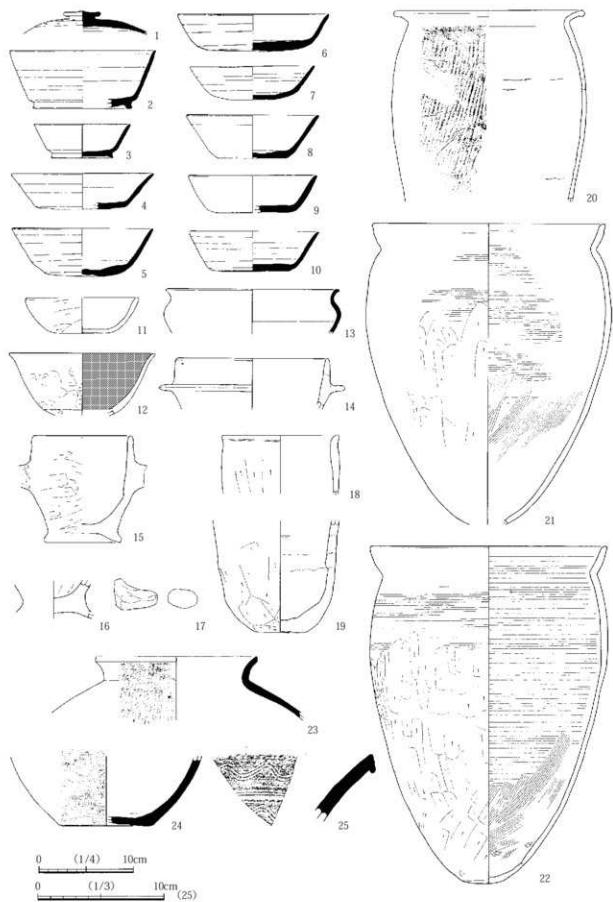


图25 SB 6 出土器物实测图 (1)

火床の周辺には、長胴甕（図25-20）の破片が散乱した状態であった。袖は石芯で、左右とも最前の2石が遺存する。右袖は右側に向かって倒れているものの、原位置から大きく動いていないとみられる。火床の奥からは口縁部を下に向けた状態の無台杯を検出した。内部に灰が詰まっており、使用期間中のいずれかの段階で支脚として伏せ置かれた可能性が考えられる。火床の手前では焼土や炭を含む断面皿形のくぼみが検出された。カマドの廃棄時に掘られたものだろう。このほかに北西壁沿いから性格不明の被熱面を検出している。

出土土器の総量は約29.3kgあり、このうち須恵器の杯蓋（1）・有台杯（2・3）・無台杯（4～10）・鉢（13）・甕（23～25）、土師器の杯（11・12）・鉢（15～17）・羽釜（14）・甕（18～22）を図示した。杯の底部切り離しはすべて回転ヘラ切りで、最終調整は有台杯が回転ケズリ、無台杯が手持ちケズリとなる。無台杯の5～9は橙色系統の色調に焼成される。12は体部が椀状に湾曲し、口縁端部をわずかに外反させる。通常底部周辺のみ限定されるケズリ調整が口縁下まで及んでいる。15・16は脚台の付く鉢状の土器である。混和剤を多く含み、外面に被熱痕が認められることから、火にかけて使用されたものとみられる。17は15の一部だろう。20は口縁部が鈎状に屈曲し、口唇部下端は玉縁状に肥厚する。外面に平行タタキ、内面に指頭圧痕が残る。26は床面から出土した砥石である。砂岩質で平面三角形の板状を呈し、広面と斜方向の側面の3面を砥面とする。

以上より、本遺構は奈良時代の所産と考えられる。

SB7

調査区西部の北寄りで検出した竪穴住居跡である。東側がSB6、南側が掘乱に切られる。掘乱を挟んで南側にも遺構覆土とみられる土の広がりを確認したが、図示した遺構範囲との連続性を認め難く、別遺構と判断した。直線的な辺と直角に曲がるコーナーをもち、隅丸方形基調の平面形が予想される。最大壁高は24cmを測る。

床面は地山を利用している。検出範囲が狹隘であり、柱穴や火処は確認されていない。

調査面積の狭さに対して出土した土器の量は約4.9kgもあるが、時期的には弥生時代末～古墳時代初頭と奈良時代をそれぞれ一定量含んでいる。図示した須恵器の甕（1）より、本遺構は奈良時代の所産と考える。

SB9

調査区西部の北端で検出した竪穴住居跡である。重複する遺構はないものの、東側が調査区外となり、全形は検出できていない。カマドと支柱穴の位置関係から考えて、平面形はカマドに直交する方向に長軸を向ける隅丸長方形と想定される。検出規模は、カマドのある北西～南東軸が4.35m、これに直交する北東～南西軸の残存長が4.13m、壁高は最大22cmを測る。

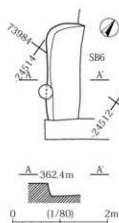


図27 SB7実測図

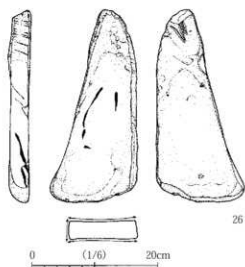


図26 SB6出土遺物実測図（2）

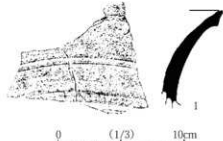


図28 SB7出土遺物実測図

床面には北西側を中心に貼床が施されている。主柱穴は4箇所のうち2箇所を検出した。カマドは北西壁に構築されており、火床と左右袖の痕跡が遺存する。袖は石芯で、左袖に1石、右袖に1石分の設置痕を検出した。火床の手前に被熱面を切る皿状のくぼみがあり、内部から数個の拳大の礫を確認した。カマド廃棄時にカマド石材を集積したものであろう。床面直上から覆土にかけて比較的遺存度の高い土器が出土している。

出土土器の総量は約9.7kgあり、このうち須恵器の杯蓋(1・2)・無台杯(3)・有台杯(4)・短頸壺(7)、土師器の甕(5・6)を図示した。略完形品の2・4は、ともに橙色系の色調で焼成されており、セットで使用されていた可能性がある。3

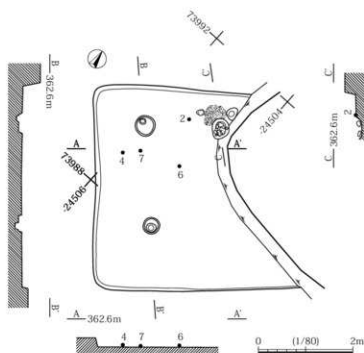


図29 SB 9 実測図



写真14 SB 9 遺物出土状況



写真15 SB 9 遺物出土状況

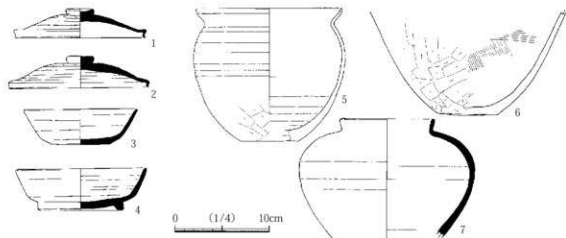


図30 SB 9 出土遺物実測図

はいわゆる箱型を呈し、底部と体部間の稜線は明瞭である。底部切り離し技法は回転糸切りである。7の肩部は丸みをおびて大きく張り、口縁部はわずかに外傾して短く立ち上がる。

以上のことより、本遺構は奈良時代の所産と考えられる。

SB10

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。平安時代のSB10と時期不明のSD1に切られ、また調査区中央に設定した東西方向の遺構確認トレンチが西隅から南東壁中央にかけて床面を掘り込む。なお、時期的に後出するSB11を本遺構よりも後に検出・調査したため、遺構の構築順序と実測図の表現が逆になっている。検出規模は、カマドのある北西—南東軸が4.97m、これと直行する北東—南西軸が4.68m、最大壁高は14cmを測る。

床面は地山をそのまま利用しており、硬化面は認められない。主柱穴は4箇所のうち3箇所を検出した。カマドは北西壁の中央部に構築される。火床のみの検出であるが、中央部が硬化し、よく被熱している。火床の上部およびその周辺から土師器長胴甕の破片を検出した。

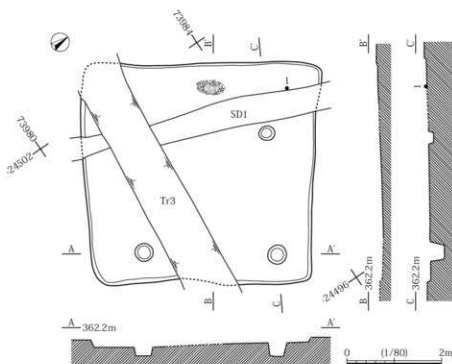


図31 SB10実測図

出土土器の総量は約4.7kgあり、このうち須恵器の無白杯(1)を図示した。全体的ににぶい橙色を呈し、内外面に火樫が認められる。底部切り離しは回転ヘラ切りで、手持ちケズリ調整を施す。カマド火床上から出土した長胴甕は、直線的な胴部から口縁が外反して開き、外面にケズリ調整を施す。

本遺構は奈良時代の所産と推定される。

SB11

調査区の中央部で検出した隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。重複するSB10により東隅を欠失するほか、遺構確認トレンチの掘削により床面が部分的に掘り込まれる。なお、時期的に先行するSB10を調査した後に本遺構を検出・調査し



写真16 SB10カマド周辺遺物出土状況



図32 SB10出土遺物実測図

たため、遺構の構築順序と実測図の表現が逆になっている。検出規模は、カマドのある北東—南西軸が3.78m、これに直行する北西—南東軸が4.45m、最大壁高が17cmを測る。

床面は地山をそのまま利用したもので軟弱である。柱穴は認められない。カマドは北東壁の中央を半円形に突出して構築しており、火床・左袖を検出した。袖は石芯で、手前は設置痕のみ、奥は石材が原位置で遺存する。

出土土器の総量は約7.2kgあり、このうち須恵器の杯蓋(1・2)・有台杯(3・4)・無台杯(5・6)・長頸壺(8)・甕(10)、土師器の杯(7)・小型甕(9)を図示した。1・2は天井部が丸みをおびて高く、口縁部との境界がわずかにくぼむ。2には擬宝珠状の扁平なつまみが付くが、1は剥離により欠損し、ロクロ成形時の糸切り痕が残る。有台杯の底部切り離しは、3が回転ヘラ切り、4が回転糸切りである。5・6の底部切り離しは回転糸切りで、有台杯と比べるとやや焼成は軟質である。5の内外面には火漶が残る。7はロクロ成形で、底

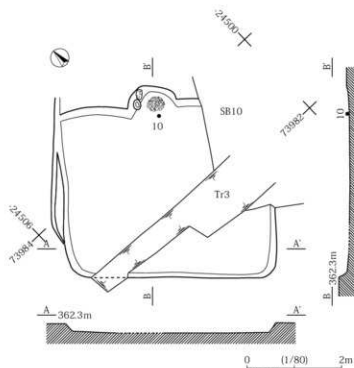


図33 SB11実測図

部およびその外周に手持ちケズリ調整を施す。内面は丁寧にミガキ調整が施され黒色処理される。9はロクロ成形で、5と同様、底部およびその外周を手持ちケズリ調整で仕上げる。本遺構は切り合い関係のあるSB10の遺物を含む可能性もあるが、住居形態より平安時代前半の所産と考えられる。

SB15

調査区南東隅で検出した隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。試掘坑により西隅が、排水傾溝により東隅がそれぞれ掘り込まれる。検出規模は、カマドのある北西—南東軸が3.83m、これに直交する北東—南西軸が4.29m、壁高が最大32cmを測る。

床面は地山面を利用しており、硬化面は認められない。主柱穴は4箇所である。カマドは、被熱の弱い火床のみが北西壁のやや南西

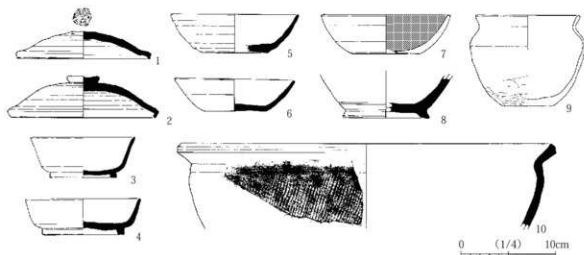


図34 SB11出土土物実測図

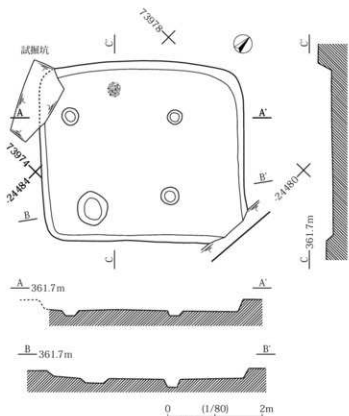


図35 SB15実測図

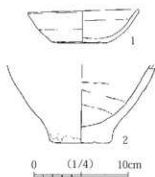


図36 SB15出土遺物実測図

寄りで検出された。

出土土器の総量は約5.1kgある。弥生時代末～古墳時代初期のものも多く含み、奈良時代以降のものは客観的な存在であった。図示したのは、土師器の杯（1）・甕（2）である。1はロクロ成形で底部切り離しは回転糸切りである。器面が摩耗し不明瞭であるが、内面にはミガキ調整が施される。

出土遺物・住居形態から、本遺構は平安時代との所産と考えられる。

（3）時期不明の遺構

調査区の南東隅で検出した堅穴住居跡のSB2は、表土掘削で覆土のほとんどを削平してしまい、わずかに残った床面と調査区壁面でその存在を確認し得た（図6・7）。SB1と重複しており、平面ではSB2が先行するように見受けられるが、擾乱により壁面での確認が行えず、また出土遺物もないことから

時期不明とした。また遺構番号は付さなかったが、SB12西側には堅穴住居の火処の痕跡とみられる2箇所の被熱面が並列する。

中央部を南北に縦貫するSD1・2は包含層を切る。中世以降の年代が与えられ、SD1に関しては自然流路の可能性もある。

土坑は、調査区南西隅で9基がまとまって検出された。円形を呈し、径は約40～80cmを測る。浅いものが多く、SB2と同様にもう少し高い位置から掘り込まれていたと思われる。

（4）遺構外の遺物

検出作業等で遺構に伴わずに出土した遺物や、出土遺構と大きく時期が異なる遺物を、遺構外遺物として一括して報告する。縄文時代～弥生時代後期は遺物のみの出土で、本調査で該当する時期の遺構は検出されていない。

1～10・65は縄文時代の遺物である。後期前葉堀ノ内式から中葉の加曾利B式に併行する時期のもので、8～10は長野県内では出土例の少ない北陸の気屋式土器（米沢2008）である。11～19は弥生時代中期後半の栗林式土器で、石川日出志による福年（石川2002・2012）の2式（古）～（新）の範囲で把握できる。29～39は弥生時代後期前半吉田式土器を中心とするもので、一部、先行する栗林式および後続する箱清水式を含む可能性がある。40～52は弥生時代末～古墳時代前期の土器である。外来系土器を中心に抽出・円化しており、51・52は小片ながら手埴形土器とみられる。53～64は奈良時代～平安時代の土器である。54の右台杯底部外面には成整形とは関係のない2枚状の木葉痕が残されている。このほか、時期不明のミニチュア土器（66）、弥生時代中期とみられる石器（67～74）がある。

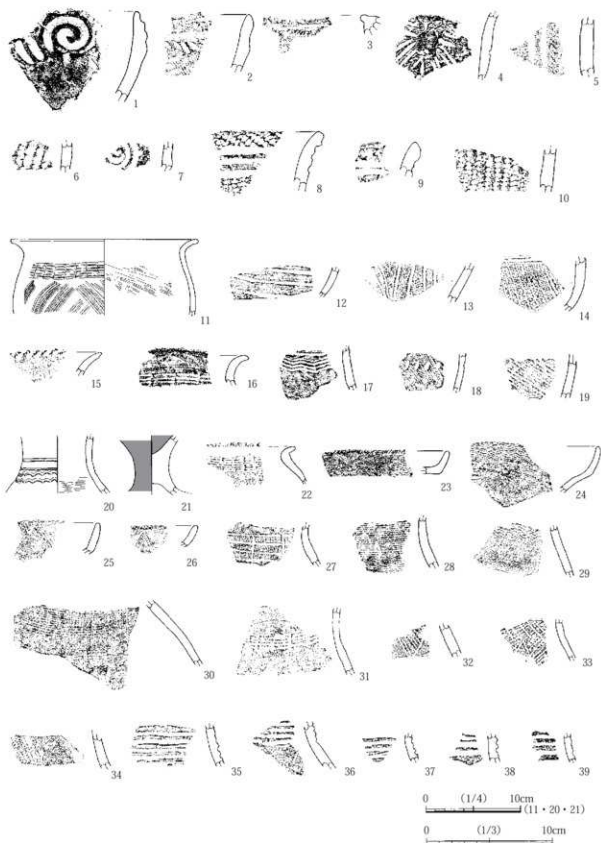


图37 遺構外出土遺物実測図(1)

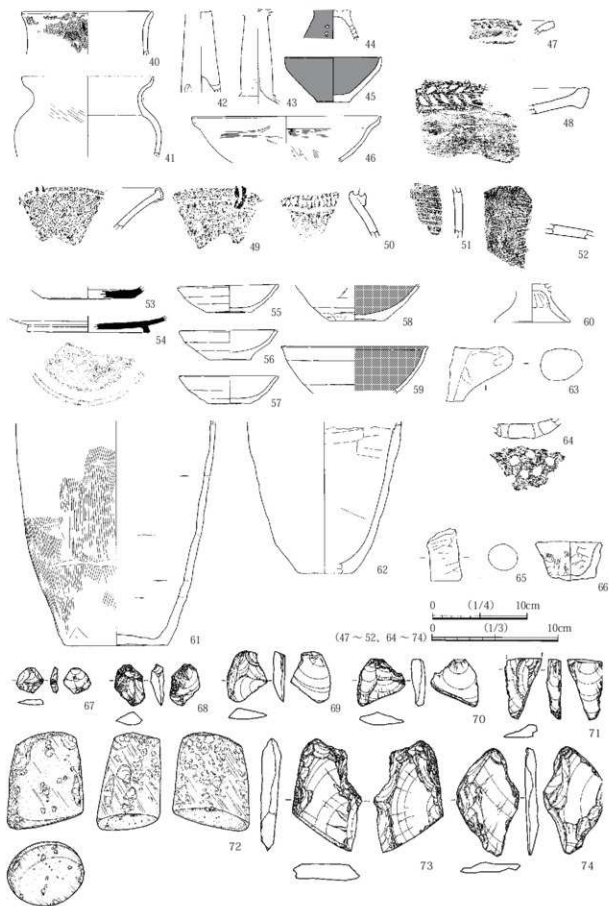


图38 遗構外出土遺物実測図(2)

表2 土器観察表

層位 遺構直面に接するものを床面、床面に近いものを床面直上の略で床直、床直より上位を覆土と表記した。また、住居跡出土土器のうちカマドに接しているものをカマド、カマドに近いものをカマド周辺の略でカ周と表記した。いずれの場合も、その区分基準は厳密でない。
種別 弥生時代末～古墳時代初期の土器については、弥生土器とするか土師器とするかで見解が分かれる。本書では未記入とした。
遺存 図化範囲における残存率を分数で表記した。
色調 農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新標準土色帖」の色名を表記した。ただし「にぶい」は「に」と略した。

図 番号	陶器 番号	遺構	層位	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・備考	取上	実測 番号
9	1	SB12	覆土	-	壺	1.5	に黄褐色	外:赤彩縦ミガキ、内:赤彩横ミガキ		SB12	6
9	2	SB12	覆土	-	壺	1.3	に黄褐色	外:縦ハケ→赤彩縦ミガキ、内:縦ミガキ・横ミガキ	口唇:2本1組様状浮文(1/?)、外糸系	SB12	5
9	3	SB12	床面	-	甕	4.5	靑灰	外:縦ハケ→ナデ、内:ナデ	外糸系	SB12	4
9	4	SB12	床面	-	甕	1.1	に橙	外:縦ハケ→ナデ、内:ケズリ→ナデ	外糸系	SB12	3
9	5	SB12	床直	-	高杯	1.8	浅黄	内外:赤彩ミガキ	北陸系	SB12	2
9	6	SB12	覆土	-	高杯	4.5	に橙	外:赤彩ミガキ、内:イタナデ→ケズリ	脚:円形透かし孔(3/3)、東海系、位置有り	SB12	1
9	7	SB12	覆土	-	手結	-	に橙	内:ハケ	龍針線文・龍直線文、外糸系	SB12	10
9	8	SB12	床直	-	壺	-	に橙	脚:龍針羽状文・龍直状文、黒唐、東海系	SB12	8	
11	1	SB13	床直	-	壺	1.8	に黄褐色	外:縦ミガキ、内:横ミガキ	頸:輪丁字文	SB13	25
11	2	SB13	床直	-	壺	1.2	黄褐色	外:1線縦ハケ→横ナデ	脚:輪丁字文	SB13	10
11	3	SB13	床直	-	甕	1.5	灰黄褐色	口縁:横ナデ、外:縦ハケ→ナデ、内:縦イタナデ	粘土継接合痕、頸部内面に赤色顔料付着、北陸系	SB13	21
11	4	SB13	覆土	-	甕	1.4	黄褐色	外:1線縦ハケ→龍針ハケ	外糸系	SB13	17
11	5	SB13	床直	-	甕	1.4	靑	口縁:横ナデ、外:縦ハケ・龍針ハケ→ナデ、内:横ハケ→ミガキ	黒唐、二次焼成、外糸系、位置有り	SB13	13
11	6	SB13	床直	-	高杯	1.4	に黄褐色	外外:赤彩横ミガキ、杯内:赤彩縦ミガキ	注1	SB13	22
11	7	SB13	床直	-	高杯	2.3	に黄褐色	外:赤彩縦ミガキ、杯内:赤彩ミガキ 脚内:ケズリ	脚:三角形透かし孔(3/3)	SB13	23
11	8	SB13	床直	-	高杯	-	浅黄	脚外:赤彩縦ミガキ、脚内:横ハケ→ナデ	脚:三角形透かし孔(3/4?)	SB13	9
11	9	SB13	床直	-	高杯	1.1	に黄褐色	外:縦ハケ→縦ミガキ・横ミガキ、杯内:ミガキ、脚内:横ハケ→ケズリ→ナデ	位置有り	SB13	2
11	10	SB13	床直	-	高杯	4.5	明黄褐色	外:ミガキ、杯内:ミガキ、脚内:ケズリ→ナデ	脚:円形透かし孔(3/3)、黒唐、外糸系、位置有り	SB13	3
11	11	SB13	床直	-	器台	1.1	明黄褐色	外:縦ハケ→縦ミガキ、受内:縦ミガキ、脚内:縦ケズリ→ナデ	紋目、外糸系、位置有り	SB13	1
11	12	SB13	覆土	-	鉢	1.2	黄褐色	脚:ナデ→割下縦ケズリ、底:ケズリ、内:イタナデ	黒唐、外糸系?	SB13	18
11	13	SB13	覆土	-	壺	-	に黄褐色	頸:輪丁字文・円形浮文	SB13	19	
11	14	SB13	床面	-	甕	-	靑灰黄	頸:等間隔止蓋状文→割・龍直状文	SB13	8	
11	15	SB13	覆土	-	壺	-	灰黄	口縁:凹線文、赤色塗彩、外糸系	SB13	20	
11	16	SB13	床直	-	手結	-	灰黄	外:ハケメ、内:ナデ	腹:龍針線文・龍直線文、面:突縁・円形浮文、外糸系	SB13	15
11	17	SB13	床直	-	手結	-	明黄褐色	龍針線文、外糸系	SB13	11	
13	1	SX1	覆土	-	壺	1.6	に黄褐色	外:赤彩縦ミガキ、内:赤彩横ミガキ	SB14	16	
13	2	SX1	床直	-	壺	1.2	明黄褐色	外:縦ミガキ、内:横ミガキ	位置有り	SB14	5
13	3	SX1	覆土	-	甕	1.3	黒褐色	外:横ナデ、内:ハケ	北陸系	SB14	19
13	4	SX1	覆土	土師	壺	1.4	に橙	口縁:横ナデ、外:縦ハケ、内:イタナデ	SB14	10	
13	5	SX1	床直	-	高杯	1.8	橙	外:赤彩縦ミガキ、内:赤彩横ミガキ	北陸系	SB14	6
13	6	SX1	床直	-	高杯	4.5	に橙	外:縦ミガキ、内:ケズリ	脚内:粘土継接合痕、円形透かし孔(3/3)、北陸系	SB14	7
13	7	SX1	床直	-	器台	1.3	に黄褐色	脚外:横ナデ→ミガキ、脚内:ナデ	北陸系、摩訶	SB14	8
13	8	SX1	覆土	土師	鉢	1.3	に黄褐色	外:縦ミガキ、内:横ミガキ	化粧土剥落	SB14	17
13	9	SX1	覆土	土師	鉢	1.6	橙	-	化粧土剥落	SB14	11
13	10	SX1	覆土	土師	鉢	2.3	橙	外:ケズリ→ナデ、内:イタナデ	位置有り	SB14	1
13	11	SX1	覆土	土師	壺	1.4	に黄褐色	口縁:横ナデ、外:縦ケズリ、内:イタナデ	SB14	18	
13	12	SX1	覆土	土師	小形丸底壺	1.4	灰黄	外:ミガキ、内:1線ミガキ・割イタナデ	SB14	12	
13	13	SX1	覆土	土師	裝飾器台	2.3	に黄褐色	受外:ミガキ、受内:ミガキ	受:円形透かし孔(8/8)、位置有り	SB14	3
13	14	SX1	床直	土師	器台	1.1	に黄褐色	外:ミガキ、受内:横ハケ→ミガキ、脚内:ケズリ	外→受内化粧土一部剥落、位置有り	SB14	4
13	15	SX1	覆土	土師	器台	1.2	黄褐色	外:ミガキ、受内:ミガキ、脚内:ケズリ	脚:円形透かし孔(3/3)、位置有り	SB14	2
13	16	SX1	覆土	土師	器台	1.1	に赤褐色	受外:縦ミガキ、脚外:縦ミガキ、受内:縦ミガキ、脚内:横ケズリ	脚:円形透かし孔(3/3)	SB14	14
13	17	SX1	覆土	土師	器台	1.3	橙	外:ミガキ、受内:ミガキ	注と同一体	SB14	13
13	18	SX1	覆土	土師	器台	1.3	橙	外:ミガキ、脚内:ナデ	脚:円形透かし孔(2/?)、16と同一体	SB14	13
13	19	SX1	覆土	-	壺	-	浅黄	外糸系	SB14	15	
15	1	SD4	覆土	土師	鉢	1.2	明黄褐色	外:横ミガキ、内:横ミガキ	黒唐	SD-4	1

図 番 号	用 意 書 号	建 物	階 位	種 別	部 種	有 無	色 調	成 形・調 整	文 様・備 考	取 上	実 測 番 号
17	1	SB1	床直	須忠	有台杯	1/6	暗灰色	ロクロ成形			SB1 1
17	2	SB1	覆土	土師	杯	1/4	に黄緑	ロクロ成形?、外:ロタケズリ、手持ちケズリ			SB1 6
17	3	SB1	カマド	土師	鉢?	1/2	黒灰	日線:横ナデ、外:横ケズリ→ナデ、底:ケズリ、内:イタナデ			SB1 4
17	4	SB1	カマド	土師	鉢?	1/3	黒灰	日線:横ナデ、外:横ケズリ、内:ナデ	5と同一個体?		SB1 3
17	5	SB1	カマド	土師	鉢?	4/5	に橙	外:横ケズリ、内:横ケズリ	4と同一個体?		SB1 8
19	1	SB3	床直	土師	羹	4/5	黄緑	日線:ヨコナデ、外:縦ケズリ、内:横イタナデ	黒塗		SB3 1
19	2	SB3	床直	土師	羹	4/5	橙	日線:ヨコナデ、外:縦ケズリ、内:横イタナデ	黒塗		SB3 2
19	3	SB3	床直	土師	瓶	1/3	に黄緑	外:縦ケズリ→横ケズリ、内:横イタナデ	黒塗		SB3 3
21	1	SB4	覆土	土師	杯	1/3	黒灰	外:横ナデ→横ケズリ、底:ナデ、内:横ミガキ	内:黒色処理(不良)		SB4 1
21	2	SB4	覆土	須忠	長頸壺	4/5	灰	ロクロナデ	高台		SB4 5
21	3	SB4	覆土	土師	羹	1/2	黒灰	ロクロ成形			SB4 2
21	4	SB4	覆土	土師	羹	1/3	橙	ロクロナデ、内:カキメ			SB4 3
21	5	SB4	覆土	土師	羽釜	-	に黄緑	外:横ナデ、内:ナデ			SB4 4
21	6	SB4	覆土	須忠	杯	-	灰黒		底:ヘラ記号「×」		SB4 9
23	1	SB5	覆土	須忠	有台杯	1/5	灰	ロクロ成形、底:回転ケズリ			SB5 7
23	2	SB5	覆土	土師	瓶	1/5	橙	ロクロ成形、内:ミガキ、底、回転ケズリ	内:黒色処理、貼付高台		SB5 5
23	3	SB5	覆土	土師	満?	1/5	黒灰	外:不明、内:横ミガキ	二次焼熱		SB5 4
23	4	SB5	カマド	土師	羹	1/3	に橙	外:縦ケズリ、内:イタナデ	黒塗		SB5 12
25	1	SB6	覆土	須忠	杯蓋	4/5	灰	ロクロ成形、回転ケズリ			SB6 23
25	2	SB6	覆土	須忠	有台杯	1/5	灰	ロクロ成形、底:回転ケズリ			SB6 15
25	3	SB6	カマド	須忠	有台杯	1/2	灰	ロクロ成形、底:回転ケズリ	自然釉、位置有り		SB6 1
25	4	SB6	柱穴	須忠	無台杯	1/4	暗灰色	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ			SB6 25
25	5	SB6	カマド	須忠	無台杯	4/5	灰	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ	内面に被熱痕		SB6 26
25	6	SB6	床面	須忠	無台杯	4/5	橙	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ	位置有り		SB6 2
25	7	SB6	床面	須忠	無台杯	1/3	橙	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ?	位置有り		SB6 4
25	8	SB6	カ明	須忠	無台杯	1/3	橙	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ			SB6 16
25	9	SB6	覆土	須忠	無台杯	1/3	灰黄緑	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ			SB6 3
25	10	SB6	床直	須忠	無台杯	1/3	灰	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ			SB6 5
25	11	SB6	床面	土師	杯	1/4	橙	外:ケズリ、内:ナデ	二次焼熱		SB6 27
25	12	SB6	床直	土師	杯	1/4	に橙	ロクロ成形、外:横ケズリ、内:ミガキ	内:黒色処理		SB6 7
25	13	SB6	覆土	須忠	鉢	1/6	灰	ロクロ成形			SB6 17
25	14	SB6	覆土	土師	羽釜	1/6	に黄緑	横ナデ			SB6 14
25	15	SB6	覆土	土師	鉢?	1/3	に赤黒	日線:ヨコナデ、外:縦ケズリ、羹内:横ハケ→イタナデ、台内:指ナデ			SB6 24
25	16	SB6	覆土	土師	鉢?	4/5	に橙	外:縦ケズリ、羹内:イタナデ、台内:指ナデ			SB6 21
25	17	SB6	覆土	土師	鉢?	-	橙		把手、5と同一個体?		SB6 13
25	18	SB6	カ明	土師	羹	1/2	橙	日線:横ナデ、外:縦ケズリ、内:イタナデ			SB6 18
25	19	SB6	床直	土師	羹	1/3	に橙	外:縦ケズリ、底:ケズリ、内:イタナデ	粘土継接合痕		SB6 6
25	20	SB6	カマド	土師	羹	1/2	橙	日線:横ナデ、外:平行タタキ、内:指頭圧痕	粘土継接合痕		SB6 11
25	21	SB6	覆土	土師	羹	1/2	橙	ロクロナデ、外:カキメ→縦ケズリ、内:ナデ、内:カキメ→横ハケ	粘土継接合痕		SB6 19
25	22	SB6	床直	土師	羹	4/5	浅黄緑	ロクロナデ、外:カキメ→縦ケズリ、底:ケズリ、内:カキメ→横ハケ	内面内面にヘラ記号「×」		SB6 8
25	23	SB6	覆土	須忠	羹	1/2	灰	平行タタキ			SB6 9
25	24	SB6	覆土	須忠	羹	1/3	灰	外:平行タタキ、底:回転ヘラ切り→ナデ			SB6 10
25	25	SB6	覆土	須忠	羹	-	暗灰	日線:波状文			SB6 22
28	1	SB7	覆土	須忠	羹	-	灰				SB7 11
30	1	SB9	覆土	須忠	杯蓋	1/3	灰	ロクロ成形、外:回転ケズリ			SB9 7
30	2	SB9	床直	須忠	杯蓋	1/1	橙	ロクロ成形、外:回転ケズリ	位置有り		SB9 1
30	3	SB9	覆土	須忠	無台杯	2/3	灰	ロクロ成形、底:回転系切り			SB9 6
30	4	SB9	覆土	須忠	有台杯	9/10	橙	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→回転ケズリ	位置有り		SB9 3
30	5	SB9	覆土	土師	羹	1/5	に黄緑	ロクロ成形、外:側下ケズリ			SB9 8
30	6	SB9	覆土	土師	羹	1/3	に橙	外:ケズリ、底:ケズリ、内:ハケメ→イタナデ	位置有り		SB9 4
30	7	SB9	覆土	須忠	切頭煎	1/2	灰	ロクロ成形	自然釉、位置有り		SB9 2
32	1	SB10	床面	須忠	無台杯	1/2	に橙	ロクロ成形、底:回転ヘラ切り→手持ちケズリ	火跡、位置有り		SB10 1
34	1	SB11	覆土	須忠	杯蓋	1/3	灰	ロクロ成形、外:上半回転ケズリ	つまみ剥離面に赤切り痕		SB11 7
34	2	SB11	覆土	須忠	杯蓋	1/3	灰	ロクロ成形、外:上半回転ケズリ			SB11 6
34	3	SB11	覆土	須忠	有台杯	1/3	灰	ロクロ成形、底:回転ケズリ			SB11 4

図 番 号	陶 器 名	遺 構	層 位	種 別	器 種	遺 存	色 調	成 形・調 整	文 様・書 考	取 上	実 測 番 号
34 4	SB11	覆土	須恵	有台杯	4.5	灰	ロク口成形、底：回転糸切り			取上	SB11 5
34 5	SB11	覆土	須恵	無台杯	1.4	黄灰	ロク口成形、底：回転糸切り	大摩			SB11 3
34 6	SB11	覆土	須恵	無台杯	2.3	灰	ロク口成形、底：回転糸切り				SB11 9
34 7	SB11	覆土	土師	杯	1.3	に黄澄	ロク口成形、底：手持ちケズリ、内：横ミガキ	内：黒色処理			SB11 2
34 8	SB11	覆土	須恵	長頸壺	1.4	灰	ロク口成形、底：回転ケズリ、内：カキメ	自然釉			SB11 10
34 9	SB11	覆土	土師	壺	1.3	明黄陶	ロク口成形、外：下半横ケズリ、底：ケズリ				SB11 8
34 10	SB11	方眼	須恵	壺	1.8	灰	口縁～内：回転ナデ、外：平行タタキ	設置有り			SB11 1
36 1	SB15	覆土	土師	杯	3.4	に黄澄	ロク口成形、内：横ミガキ				SB15 7
36 2	SB15	床直	土師	壺	4.5	黒灰	外：ケズリ、底：ケズリ、内：ナデ				SB15 5
37 1	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に黄澄		渦巻文			SB13 12
37 2	道橋外	-	縄文	深鉢	-	黒灰		沈線文・刷目			SB14 20
37 3	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に橙		波状口縁			SB 7 4
37 4	道橋外	-	縄文	深鉢	-	黒陶		沈線文・貼付文			SB 1 5
37 5	道橋外	-	縄文	深鉢	-	黒陶		沈線文・縄文			検出 1
37 6	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に赤褐		縄文			SB 6 20
37 7	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に橙		渦巻文			SB 5 1
37 8	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に黄澄		口縁：縄文・沈線文、9・10と同一個体、欠短式			SB 7 9
37 9	道橋外	-	縄文	深鉢	-	に黄澄		口縁：縄文・沈線文、8・10と同一個体、欠短式			SB 4 6
37 10	道橋外	-	縄文	深鉢	-	黒陶		縄文、8・9と同一個体、欠短式			SB 7 10
37 11	道橋外	-	弥生	壺	1.4	黒陶	口縁：横ナデ、内：横ハケ→横ミガキ	頸：等間隔止線状文、胴：櫛状文			SB13 4
37 12	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		渦巻文			SB 7 6
37 13	道橋外	-	弥生	壺	-	に橙		沈線文			検出 14
37 14	道橋外	-	弥生	壺	-	に橙		胴：縄文状圧痕→距直線文・斜距斜線文			検出 15
37 15	道橋外	-	弥生	壺	-	に橙	口縁：ヨコナデ、内：横ミガキ	口唇：縄文→刷目			Tr11 2
37 16	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		頸：等間隔止線状文			SB 3 5
37 17	道橋外	-	弥生	壺	-	黒灰黄		頸：櫛状文			SB13 7
37 18	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		頸：櫛状文・斜交文			SB 9 9
37 19	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		胴：斜線文			SB 7 1
37 20	道橋外	-	弥生	壺	1.5	橙	外：ミガキ、内：横ハケ→ミガキ	頸：距直線文→距波状文			SB 5 2
37 21	道橋外	-	弥生	高杯	1.1	に黄澄	外：赤彩ミガキ、杯内：赤彩ミガキ、脚内：ケズリ	黒灰、磨耗			検出 2
37 22	道橋外	-	弥生	広口壺	1.8	橙	外：ハケメ、口縁内：赤彩横ミガキ、内：ハケメ→横ミガキ	口唇：縄文？、頸：等間隔止線状文→胴：櫛状文			Tr11 1
37 23	道橋外	-	弥生	壺	1.8	に黄澄		口唇：刷目、口縁：櫛状文			SB 1 2
37 24	道橋外	-	弥生	壺	-	浅黄澄		口縁：櫛状文			漆黒 1
37 25	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		口縁：刷面文			検出 10
37 26	道橋外	-	弥生	壺	-	浅黄澄		口唇：縄文、口縁：刷面文			SB 4 8
37 27	道橋外	-	-	壺	-	に橙		頸：簡丁字文			SB12 9
37 28	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		頸：距直線文・櫛状文			SB13 6
37 29	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄	外：赤彩ミガキ	胴：櫛状文			検出 17
37 30	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄	赤彩ミガキ	頸：簡丁字文、等間隔止線状文→赤彩			舞臺 1
37 31	道橋外	-	弥生	壺	-	に橙		頸：等間隔止線状文			Tr12 1
37 32	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		胴：刷面文			検出 11
37 33	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		頸：斜格子文・刷面文			検出 13
37 34	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄澄		三角文（斜格子文光順）			検出 12
37 35	道橋外	-	弥生	壺	-	に橙		距直線文			SB 4 10
37 36	道橋外	-	弥生	壺	-	に黄		距直線文			SB 5 8
37 37	道橋外	-	弥生	壺	-	黄陶		距直線文			SB 5 9
37 38	道橋外	-	弥生	壺	-	黄陶		距直線文			SB 5 10
37 39	道橋外	-	弥生	壺	-	黄陶		距直線文			SB 5 11
38 40	道橋外	-	-	壺	1.3	に黄澄		口縁：櫛状文			SB 7 7
38 41	道橋外	-	-	壺	1.3	に橙	口縁：横ナデ、外：斜ハケメ、内：ケズリ→横ミガキ	匙線系			SB 7 8
38 42	道橋外	-	土師	高杯	1.1	橙	外：横ミガキ	脚：円形透かし孔（3/3）、黒漆			SB 5 6
38 43	道橋外	-	土師	高杯	5.6	橙	脚外：縦ケズリ→縦ミガキ				SB 6 12
38 44	道橋外	-	-	高杯	4.5	黄澄	外：赤彩ミガキ、内：ケズリ	脚：円形透かし孔（3/3）			SB15 6
38 45	道橋外	-	-	鉢	1.2	に黄澄	外：赤彩横ミガキ、内：赤彩横ミガキ				SB 9 5
38 46	道橋外	-	土師	鉢	1/4	に橙	外：横ハケ→横ミガキ、内：横ハケ→横ミガキ				乗機 3
38 47	道橋外	-	-	壺	-	に黄陶		口唇：櫛状文、黒灰、東海系			検出 16
38 48	道橋外	-	-	壺	-	黒陶		口唇：羽状斜交文、東海系			SB 1 7

図 番号	掲載 番号	遺構	層位	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・備考	取上	実測 番号
38	49	道橋外	-	-	壺	-	に橙	外：縦ミガキ	口唇：縞波状文・棒状浮文・赤彩、口縁内：縞波状文・刷目、東海系	SB3	4
38	50	道橋外	-	-	壺	-	に橙		頸：貼付突帯・刺突文、外朱系	SB7	7
38	51	道橋外	-	-	手拵	-	明黄緑		龍直線文、外朱系	検出	18
38	52	道橋外	-	-	手拵	-	明黄緑		龍直線文、外朱系	壺	1
38	53	道橋外	-	須忠	杯	1.5	灰黒		底：ヘラ記号	検出	7
38	54	道橋外	-	須忠	有台杯	1.3	黄灰	ロクロ成形、底：回転ケズリ	底：木葉脈・指面圧痕	検出	4
38	55	道橋外	-	土師	杯	4.5	に黄橙	ロクロ成形、底：回転糸切り、内：横ミガキ	位置有り	SB15西	1
38	56	道橋外	-	土師	杯	4.5	に黄橙	ロクロ成形、底：回転糸切り、内：横ミガキ	位置有り	SB15西	2
38	57	道橋外	-	土師	杯	4.5	に黄橙	ロクロ成形、底：回転糸切り、内：横ミガキ	位置有り	SB15西	3
38	58	道橋外	-	土師	杯	2.3	浅黄	ロクロ成形、外：ケズリ、内：ミガキ	内：黒色処理	検出	2
38	59	道橋外	-	土師	杯	1.4	明黄緑	ロクロ成形、内：横ミガキ	内：黒色処理	SB15西	4
38	60	道橋外	-	土師	高杯	1.1	浅黄橙	外：縦ミガキ、杯内：ミガキ、脚内、ミガキ	杯内：黒色処理	Tr3	2
38	61	道橋外	-	土師	壺	1.3	に橙	外：縦ハケ、底：ケズリ、内：筋ナデ		Tr3	3
38	62	道橋外	-	土師	壺	1.3	褐灰	外：縦ケズリ→ナデ?、底：ケズリ、内、イタナデ	粘土継接合痕	Tr3	4
38	63	道橋外	-	土師	瓶	-	に橙	外：ナデ、内：ナデ	把手	重複	1
38	64	道橋外	-	土師	瓶	-	に橙		多孔	清掃	2

表3 土製品観察表

層位・色調 土器に準ずる。

図 番号	掲載 番号	遺構	層位	時期	名称	石材	法量	特徴	取上	実測 番号
9	9	SB12	覆土	-	円盤形土製品	黄褐色	長さ2.0cm×幅2.1cm×厚さ0.55cm、重量9.2g、	穿孔、土器転用	SB12	7
11	18	SB13	床直	-	ミニチュア土器	に黄橙	高さ2.4cm×幅3.1cm、重量28.9g(補強材含む)		SB13	24
21	7	SB4	覆土	奈良	棒状土製品	浅黄緑	長さ5.9cm×幅2.4cm×厚さ1.2cm、重量9.3g	上下欠損、曜の表現	SB4	7
38	65	道橋外	-	不明	土偶	橙	高さ5.7cm×厚さ3.3cm、重量64.5g	脚部	SB5	3
38	66	道橋外	-	不明	ミニチュア土器	に黄	高さ3.5cm×幅3.2cm、重量40.9g	手捏ね	検出	3

表4 石器観察表

層位 土器に準ずる。

図 番号	掲載 番号	遺構	層位	時期	名称	石材	法量	特徴	取上	実測 番号
26	26	SB6	床直	奈良	砥石	砂岩	長さ30.75cm×幅14.0cm×厚さ3.6cm、重量1692g	位置有り	SB6	63
38	67	道橋外	-	-	潤片	安山岩	長さ2.0cm×幅2.1cm×厚さ0.55cm、重量1.7g		SB6	44
38	68	道橋外	-	-	加工痕ある潤片	ナール	長さ3.2cm×幅2.3cm×厚さ1.0cm、重量6.2g		検出	10
38	69	道橋外	-	-	潤片	安山岩	長さ4.0cm×幅3.1cm×厚さ0.9cm、重量10.8g		SB6	84
38	70	道橋外	-	-	潤片	泥岩	長さ3.65cm×幅3.7cm×厚さ1.1cm、重量12.5g		検出	96
38	71	道橋外	-	-	加工痕ある潤片	砂岩	長さ4.75cm×幅2.8cm×厚さ1.1cm、重量10.6g		SB5	56
38	72	道橋外	-	-	強半	石炭	長さ7.6cm×幅6.0cm×厚さ5.0cm、重量373.6g		SB14	159
38	73	道橋外	-	-	加工痕ある潤片	安山岩	長さ8.8cm×幅3.4cm×厚さ1.5cm、重量73.5g	石屑未成品?	潤滑	3
38	74	道橋外	-	-	加工痕ある潤片	泥岩	長さ2.0cm×幅2.1cm×厚さ0.55cm、重量1.77g		SB14	150

第四章 吉田四ツ屋遺跡出土の手焙形土器について

1. はじめに

今回の調査で注目される成果に手焙形土器¹⁾の出土がある。手焙形土器は、弥生時代後期後半に近畿地方で誕生した、鉢形土器の上部に一方が開口する覆いを被せた土器である。集落や墳墓で用いた祭祀具とされるが、弥生時代末～古墳時代初頭に東西日本へ拡散したのち古墳時代前期には消滅しており、使用された期間は短い。手焙形土器の集成を精力的に進める高橋一夫によれば、西は九州から東は関東まで出土総数は800個体余りを数える(高橋2003)が、分布の中心地である近畿地方、および岡山県・三重県・愛知県・千葉県など一部の例外を除けば出土数が10個体に満たない県が多く(高橋1998)。絶対量の少ない遺物と言ってよいだろう。

長野県内からは、本遺跡以外に5遺跡から8点が出土する²⁾。いずれも、手焙形土器が広域に拡散した弥生時代末～古墳時代初頭のものである。この時期に全国規模で土器の移動が活発化するのによく知られており、長野盆地では北陸系土器、そして東海系土器の段階的な流入により在来の箱清水系土器が衰退していく様相が明らかにされている(赤塩1994)。当地域にとって手焙形土器はそうした「外来系土器」の一つであるが、その非日常性・稀少性からすれば、通常の外来系土器とは異なる背景のもとで本遺跡にもたらされた可能性もある。

本論では、既往の研究成果の中に吉田四ツ屋遺跡の手焙形土器がどう位置づけられるのか検討してみたい。

2. 「系統」の検討

手焙形土器の型式分類は、口縁部の形態と、口縁部と覆部の接合方法の組み合わせで行われることが多く(小竹森1990、中島1992、高橋1998)、口縁部形態が特に重要視される。これは、手焙形土器が鉢形土器から派生した器種で、「鉢部形態が概ね口縁部形態と対になっている、つまり口縁部形態が鉢部全体を代表し得る」(小竹森1990、p. 36)という認識が前提にあるためである。その代表的なものが受口状口縁とくの字口縁であり、前者が近江地方の鉢形土器、後者が河内地方の鉢形土器を祖形とすることから、高橋一夫はそれぞれの手焙形土器を「近江系」・「河内系」と呼び分けた(高橋2001)。両系統の違いは、鉢部形態にとどまらず施文の有無とも相関する。すなわち、受口状口縁を呈する近江系の手焙形土器は近江地方の鉢形土器と同様、鉢部・覆部を櫛描文・竇描文などで加飾するのに対し、くの字口縁を呈する河内系の手焙形土器は河内地方の鉢形土器と同様に無文が多く、加飾は限定的である。もちろん、時期の降下や分布域の拡大によりこれらの特徴は弛緩・混交・変容し、口縁部形態と鉢部形態・施文の有無が必ず一致するわけではない。

ここでは、吉田四ツ屋遺跡出土資料を分析する足掛かりとして、それらがどちらの系統に属するか見てみたい。出土資料は全部で5点あり、それぞれA～Eと呼称する。

A(図11-16)は、SB13から出土した開口部を含む覆部右側面の破片である。床面直上から出土した2片が接合した。大きさは8.7cm×7.5cmを測る。覆部は、先細の施文具³⁾で竇描きした4段の斜線文、および下位2段の間を区画する2条の直線文が施される。斜線文の長さや角度に一定性がなく、比較的描出が粗雑である。開口部端部は、両側から粘土を貼り合わせて断面三角形の面を形成する。面の幅は2.3cmを測り、2条の細い突線とこの間に貼付した径3mmの二つの円形浮文で加飾する。調整は、外面が斜めのハケメのチナデ、内面がナデである。欠損する口縁部については、「J」を逆にした形状の破断面を面の成形粘土が上から覆っており(写真17)、受口状口縁と判断される。よって本資料は近江系であり、覆部の装飾性の高さもその特徴をよく示している。な

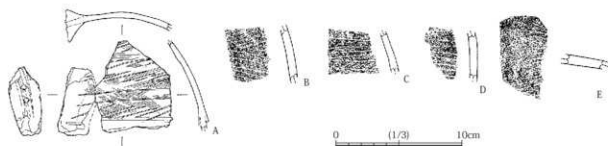


図39 吉田四ツ屋遺跡出土の手培形土器

お、外面下部に巡る低い段は鉢部と覆部の接合部に巡らされた突帯と推定され、段部下端径である17.2cmがおおよその口径と推定される。

B (図11-17) は、SB13から出土した4.5cm×3.7cmの破片である。先細の施文具で窺描きされた2単位の多条平行線が約30度で接する。平行線の間隔は2～3mmである。形態的特徴はないが、施文具や施文手法にAとの類似性が認められ、部位不確定ながら手培形土器と判断した。内面にイタナデの痕跡が確認できる。口縁部形態は不明であるが、Aとの関連から近江系と考えておきたい。

C (図9-7) は、SB12から出土した4.0cm×3.7cmの破片である。3本の斜線とこれを扶む上下2本ずつの直線が、それぞれ先細の施文具で窺描きされている。形態的特徴はないが、文様構成・施文手法がAと酷似しており、手培形土器と判断した。斜線が斜線文、直線が文様帯区画と考えられ、Aと同様、覆部の破片と判断される。内面にはハケメが明瞭に残る。口縁部形態は不明であるが、Aとの関連から近江系と考えておきたい。

D (図38-51) は、検出面から出土した2.5cm×4.0cmの破片である。先細の施文具で窺描きされた多条平行線と、これに直交する1本の直線が認められる。平行線の間隔は4～5mmで、器面への掘り込みは他の4点に比べて浅い。形態的特徴はないが、施文手法がAと類似し、部位不確定ながら手培形土器と判断した。器面の摩耗により調整は不明である。口縁部形態は不明であるが、Aとの関連から近江系と考えておきたい。

E (図38-52) は、調査区壁面の精査時に出土した4.3cm×6.9cmの破片である。ナデにより平滑に仕上げた外面に先細の施文具で多条の直線を放射状に窺描きする。線の間隔は3～4mmである、形態的特徴はないが、使用した施文具がAと類似することから手培形土器と判断した。文様の端部を含むことや、施文部に比べて無文部の厚みが増している点などから、覆部の端部付近とみている。内面の調整は摩耗により不明である。口縁部形態は不明であるが、Aとの関連から近江系と考えておきたい。

色調については、灰黄色を呈するAとにぶい黄橙色を呈するB～Eに大別できる。前者は、緻密な胎土が在土器と明らかに異なり、搬入品と判断される。後者は在土器と胎土は異なるように見えるが、Aほどの差はなく、搬入品・在地模倣品のいずれであるか判断が難しい。おそらく2～3個体分の破片だろう。

なお、手培形土器が祭祀に用いられた根拠としてしばしばススの付着が注意されるが、吉田四ツ屋遺跡出土資料についてはいずれにも認められなかった。

3. 近江地域の土器編年における位置づけ

近江地域の手培形土器との比較 近江系手培形土器であることが明らかなAについて、本質地である近江地域の手培形土器との比較により、伴野幸一による近江地域の土器編年(伴野2006、以下、近江編年)へ位置づけてみたい。



写真17 A断面

伴野は、弥生時代後期新段階をV-6期、弥生時代末～古墳時代前期前葉をVI-1期・VI-2期・VII-1期・VII-2期に区分し、この間の近江、特に湖南地域の土器編年を述べる中で、手焙形土器の変遷についても詳しく触れた。その要点は次の2点にまとめられる。

①施文は、VI-1期に縄描文から篋描文に代わり、VII期に無文化する。

②V-6期に覆部端部に形成されるようになった面が次第に上下へ拡張し、VII-2期に最大化する。

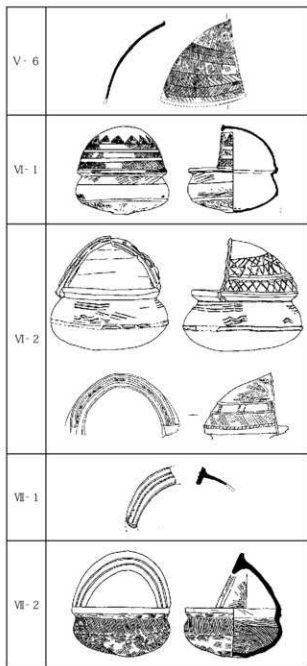
①に関して見ると、Aの覆部には篋描文が一面に施され、VI期の特徴を有することがわかる。文様帯区画にAは篋描直線文を用いるが、VI期では貼付突帯を用いる例が多くなるという。篋描直線文による区画はV-6期提示資料に認められる古い手法であるが、Aは上位の区画が省かれており、簡略化が進んだ段階とみられる。②については、Aの面積は2.3cmを測り、VI-2期提示資料下段と同程度の数値を示す。提示資料では面の装飾として2条の細い突線と竹管文を付加した小さな円形浮文を貼付するが、Aは円形浮文の竹管文を欠く。この点は、無文化が始まるVII-1期提示資料に近い様相である。

以上を総合するとAは、VI-2期でもより新相に位置づけられよう。

出土遺構の年代観との比較 次に、北陸地方の土器編年を介して、東日本一円を包括する新潟シンゴ編年（甘粕・春日1994）へ近江編年を対応させる作業を行い、Aと出土遺構であるSB13の年代観の異同を点検する。

近江—北陸間については、伴野の近江編年と堀大介の加賀編年（堀2006）の対応関係を示した森岡秀人・西村歩の論考（森岡・西村2006）を参考とすれば、近江VI-2期は加賀の月影3式・4式・白江1式前半に併行する。堀はこの時期を漆町編年（田嶋1986）の4群～5群前半に対応させており（堀2003）、これを漆町編年を基礎に構築された新潟シンゴ編年へスライドさせると4期～5期前半が近江VI-2期と併行することになる。また、新潟シンゴ編年で長野盆地を代表する千野浩の弥生後期編年（千野1992）では、V-5段階の前葉～中葉が併行する³¹（表5）。

Aが出土したSB13は、弥生時代末～古墳時代初頭、すなわち新潟シンゴ編年5・6期の範疇で報告した。5期と6期を分けるのは在来の箱清水系土器と外来の北陸系土器・東海系土器の出土比率の差である。図示した土



（伴野2006より作成）

0 (1/6) 10cm

図40 近江地域の手焙形土器

表5 編年対応表

森岡・西村 2006	近江(伴野)	V-6期		W-1期		VI-2期		VII-1期		VI-2-1期	VI-2-2期
	加賀(瓶)	法仏4式	月影1式	月影2式	月影3式	月影4式	白江1式	白江2式	白江3式	古野ケルビ式	
甘粕・春日編 1994	田嶋 1986	2群	(+)	3群	4群		5群		6群		7群
	新田シンボ	2期	3期		4期		5期		6期		7期
	千野 1992	V-4段階			V-5段階						

器に占める箱清水系土器の割合は決して高くないが、脚部に三角形透かし孔を有する高杯(図11-7・8)を伴う点や、住居形態が隅丸長方形を呈して奥側主柱穴間に土炉を設ける点は弥生時代後期により近い様相であり、SB13は5期とするのが妥当と思われる。Aが近江VI-2期の中でも新相を呈していることを考えれば、手焙形土器の年代観とSB13の年代観はほぼ一致するとみてよい。

4. 県内出土の手焙形土器

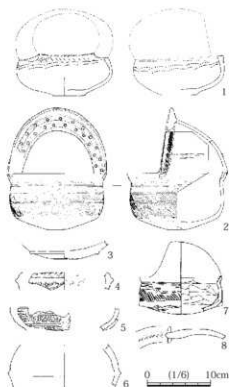
長野県内ではこれまで、中野市安源寺遺跡(中野市教育委員会1987)、松本市弘法山古墳(松本市教育委員会1993)、同出川西遺跡(松本市教育委員会2015)、塩尻市上木戸遺跡(長野県埋蔵文化財センター1988)、飯田市恒川遺跡群(飯田市教育委員会1988)の5遺跡の出土例がある(図4)。

安源寺遺跡例(1)は、素口縁の外側に刻みを施した突帯を貼り付けており、近江系とも河内系とも異なる。地域的な変容形態だろう。弘法山古墳例(2)は受口状口縁を呈する近江系である。ただ、体部が直立気味に立ち上がり、頭部のくびれをほとんど持たないま口縁部に達するのは、扁球状を呈する近江地域の鉢部形態とは様相を異にする。折衷・変容が進んだ段階のものと考えられ、幅の広い面・面への竹管文施文などの要素を取って伴野の編年に当てはめれば、VI-2段階の特徴に近い。出川西遺跡例(3-6)は口縁部のない鉢部片で、有文の2点は近江系の可能性がある。上木戸遺跡例(7)は口縁端部を欠くが、高橋一夫はくの字口縁とみる(高橋1998, p. 89)。恒川遺跡群例(8)の面は上下に長方形に拡張させた近江系新相の要素に近い印象を持つが、面に施された刻目は地域的な変容が進んだものである。

以上見てきたように、長野県内出土手焙形土器には近江系およびその可能性があるもの、河内系の可能性のあるもの、いずれでもないものの3者が認められる。本貫地の形態から逸脱した変容形態が目立つ中で、吉田四ツ屋遺跡出土例、特にAは、近江地域の特徴をよく備えている点で特筆される。

5. まとめと今後の課題

これまでの検討から、吉田四ツ屋遺跡出土の手焙形土器は次のように位置づけられる。



1: 安源寺遺跡 2: 弘法山古墳 3-6: 出川西遺跡
7: 上木戸遺跡 8: 恒川遺跡群

図4 長野県内出土の手焙形土器

・Aは、受口状口縁で装飾性の高い近江系の手培形土器で、出土遺構と共時的な近江VI-2期、すなわち新潟シンボ編年5期の資料と理解できる。在土土器との胎土の違いは明らかであり、搬入品と判断される。

・B-Eは口縁部が遺存しないが、施文具や文様構成がAと類似し、近江系の手培形土器の可能性が高い。在土土器との胎土の違いがAほどはっきりしておらず、搬入品・在地模倣品いずれの可能性も残す。2~3個体の破片と考えられる。

Aに関しては、手培形土器の持つ非日常性・稀少性から製作地と搬入ルートが問題となるが、ここでは近江系手培形土器の淵源地である近江地方で製作された可能性を指摘したい。そう考える理由として特に強調したいのが、胎土・色調の類似である。

伴野幸一は先に挙げた論考の中で、湖南地域の土器の胎土・色調の特徴として、「④きめ細かい粘土にチャート・石英・長石等を多量に混和する胎土を使用する」「⑤断面中位は灰黒色であるが表面は明るい灰黄色~灰褐色に焼き上げる」の2点を挙げた(伴野2006, p.50)。この視点でAを観察すると、緻密な胎土、灰黄色を呈する器面、暗灰色を呈する断面などの特徴が伴野の指摘とよく合致していることがわかる。胎土分析を行っていないため混和剤に関する指摘については検討できないが、少なくとも在地のそれとは異なることは明らかである。文様の類似性も勘案すれば、湖南地域で製作された蓋然性はきわめて高いと考える。

この想定が妥当ならば、近江と長野盆地に直接的関係があったか否かはさておき、北陸か東海のどちらかを經由してたらされたことになろうが、北陸3県(福井・石川・富山)で10点、東海4県(三重・岐阜・愛知・静岡)で136点^⑧という圧倒的な手培形土器の保有量の差を重視し、後者である可能性を考えたい。なお、この時期の千曲川流域に見られる受口状口縁を呈する近江系の甕(青木2001・花園1991)は、東海系土器の第1次拡散(赤塚1990)に伴い畿内のタカキ甕と共に流入したと考えられている(赤塚1994)。祭祀品である手培形土器の場合は、その移動に使用の場としての祭祀を伴っていたと考えるのが自然であり、経路は同じであっても、日常品である甕の移動とは異なる背景を想定した方がよいだろう。手培形土器が搬入された背景とそのルートについては、製作地が明らかになった段階で改めて検討しなければならない課題である。

B-Eに関しては、Aとの類似から手培形土器と判断したにすぎず詳細は不明と言わざるを得ない。想像をたくましくすれば、Aを模範として製作されたとも考えられ、Cについてはその可能性を強く感じるものである。しかしながらそれが認められたとしても、本遺跡で模倣された、あるいは別所で模倣されてAと一緒に搬入されたなど様々なパターンが想定される。いずれにしてもAの製作地の確定が先決であろう。

註

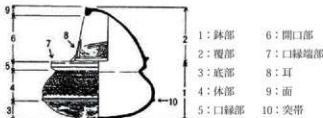
(1) 手培形土器の部分名称は、右図(高橋1998)を参考として使用する。

(2) 長野市横田遺跡の出土品に手培形土器の可能性を指摘した土器片がある(長野市教育委員会2004、図版195-1793)。本論の執筆にあたり改めて点検したところ、手培形土器ではないことを確認した。

(3) 先細の施文具を使った施文は弥生時代後期吉田式の壺形土器にも認められるが、文様構成・施文面の湾曲などを勘案し、手培形土器とした。同様の判断はB-Eに対しても行っている。

(4) 新潟シンボで中部高地の発表を担当した土屋積は、新潟シンボ編年4期を千野V-4段階に織り入れている(甘粕・春日編1994, p.94)。土屋の見解に従えば、近江VI-2期に対応するのは千野V-4段階後葉~V-5段階前半となるが、表5はシンボジウム付表(甘粕・春日編1994, p.226)に従って作成した。

(5) 高橋1998に基づく。ただしこの数値は近江系だけでなくすべての型式の手培形土器を含む。



引用・参考文献

第1章

- 惟 澤 浩 1970 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第Ⅲ期第23巻第12号、信濃史学会
長野市誌編さん委員会 1997 「長野市誌 第1巻 自然編、長野市
長野市教育委員会 1996 「浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡（6）・粟河原遺跡」長野市の埋蔵文化財第75集
長野市教育委員会 2007 「浅川扇状地遺跡群 吉田古塚敷遺跡（3）」長野市の埋蔵文化財第118集
長野県埋蔵文化財センター 1998 「浅川扇状地遺跡群・三才遺跡群」（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書34

第2章

- 石川 日出志 2002 「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会
石川 日出志 2012 「Ⅱ 栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市 柳沢遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
白居 直之 1997 「第1節 古墳時代前期の土器群の分類」『石川系里遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26
米沢 義光 2008 「気屋式土器」『総覧 縄文土器』（小林達雄 編）、「総覧 縄文土器」刊行委員会

第3章

- 青木 一男 2001 「倭国大乱期前後の箱清水式土器様式圏」『信濃』第Ⅲ期第53巻第11号、信濃史学会
赤塚 次郎 1990 「Ⅴ 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
赤塚 仁 1994 「第7節 弥生時代後期から古墳時代初期の土器様相」『栗林遺跡・七瀬遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10
甘粕健・春日真実 編 1994 「東日本の古墳の出現」、山川出版社
飯田市教育委員会 1988 「恒川遺跡群」
小竹森 直子 1990 「手焙形土器雑想—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—」『紀要』第3号、（財）滋賀県文化財保護協会
高橋 一夫 1998 「手焙形土器の研究、六一書房」
高橋 一夫 2001 「手焙形土器—その宗教性と政治性—」『研究紀要』第16号、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高橋 一夫 2003 「手焙形土器—近畿と関東—」『初期古墳と大和の考古学』（石野博信 編）、学生社
田嶋 明人 1986 「Ⅳ 考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡Ⅰ』、石川県立埋蔵文化財センター
千野 浩 1992 「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』第Ⅲ期第41巻第4号、信濃史学会
中島 啓夫 1992 「手焙形土器について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』（中山修一先生喜寿記念事業会 編）、三星出版
長野県埋蔵文化財センター 1988 「青木沢東・青木沢・八雲・大原・北山・御堂垣外・栗木沢・ヨケ・樋口・高山城跡・竜神・竜神平・山の神・中原・大原・上木戸・千木原・高田・吉田向井遺跡」（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
中野市教育委員会 1987 「安源寺遺跡Ⅲ」
長野市教育委員会 2004 「浅川扇状地遺跡群 榎田遺跡（2）」長野市の埋蔵文化財第105集
花岡 弘 1991 「6 中部高地」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』（石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白市太郎 編）、雄山閣
伴野 幸一 2006 「近江地域—野洲川流域を中心に—」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
堀 大介 2003 「月影式の成立と終焉」『古墳出現期の土師器と実年代』（財）大阪府文化財センター
堀 大介 2006 「越前・加賀」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
松本市教育委員会 1993 「弘法山古墳出土遺物の再整理—新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理—」松本市文化財報告No.111
松本市教育委員会 2015 「長野県松本市出川西遺跡—第10次発掘調査報告書—」松本市文化財調査報告No.216
森岡秀人・西村歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

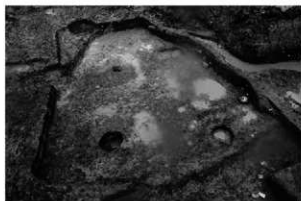


調査区全景（航空撮影、上が北）



調査区全景（北東より）

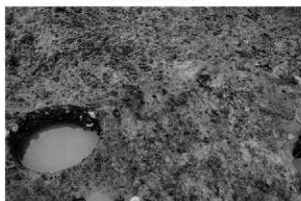
写真図版 2



SB12 (南東より)



SB13 (南東より)



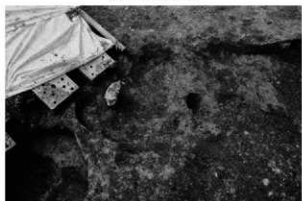
SB13主炉 (南東より)



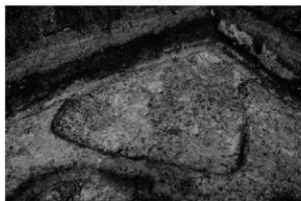
SX1 (南東より)



SB1 (南より)



SB1カマド (南東より)



SB3 (南東より)



SB4 (南東より)



SB5 (南東より)



SB6 (南東より)



SB6 カマド (南東より)



SB9 (南より)



SB9 カマド (南より)



SB10 (南東より)



SB11 (南東より)



SB15 (東より)

写真图版 4



图9-2



图9-7



图9-9



图9-6

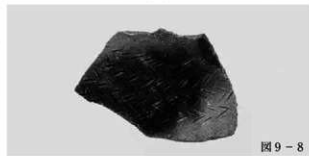


图9-8



图11-2



图11-4



图11-10



图11-11



图11-16



图11-17



写真图版 6



图19-1



图19-3



图25-1



图23-4



图25-3



图25-20



图25-5



图25-6



图25-23

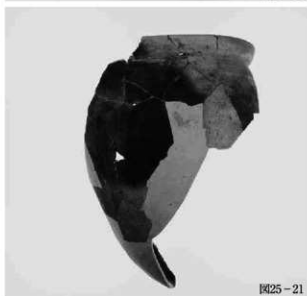


图25-21



图25-22



图26-26



图30-1



图30-2



图30-3



图30-7



图30-4



图34-3



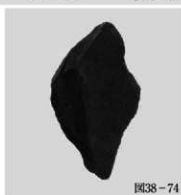
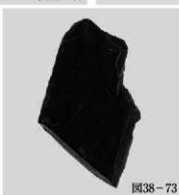
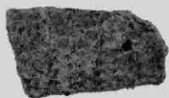
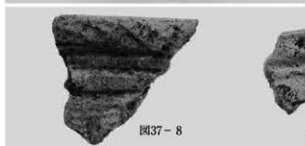
图34-4



图34-6



图34-7



報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん よしだよつやいせき 2		
書名	浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡（2）		
副書名	サーパス北長野駅レジデンス新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財		
シリーズ番号	第160集		
編集者名	清水竜太		
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター		
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106		
発行年月日	2021年3月4日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
浅川扇状地 遺跡群 吉田四ツ屋 遺跡	長野県長野市 吉田四丁目 1387番1 外	20201	A-086	36° 38° 55°	138° 11° 41	20190704 ～ 20190822	613㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
吉田四ツ屋 遺跡	集落跡	縄文時代後期前半				縄文土器・土偶	気屋式土器	
		弥生時代中期後半 ～後期後半				弥生土器 石器		
		弥生時代末～ 古墳時代前期		堅穴住居跡 2軒 溝跡 1条 性格不明遺構 1基	土器 土製品		手焙形土器	
		奈良時代～平安時代		堅穴住居跡 10軒	土師器・須恵器			
		時期不明		堅穴住居跡 1軒 土坑 9基 溝跡 3条 被熱面 2箇所				

要旨	<p>吉田四ツ屋遺跡は、浅川扇状地の扇中部に立地する縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡である。今回の調査では、弥生時代末～平安時代の堅穴住居跡12軒のほか性格不明遺構・溝跡・土坑などを検出した。縄文時代～弥生時代後期の遺構は、調査地周辺に存在するものと予想される。遺構・遺物の検出状況や地形の起伏から考えて、調査地は遺構分布域の外縁付近に位置しているとみられる。</p> <p>特記事項として、弥生時代末～古墳時代初頭の手焙形土器が出土したことが挙げられる。手焙形土器は5点ありいずれも形式的に近江系に分類される。このうちもっとも遺存状態が良いSB13出土のものは、施文・胎土の特徴から、近江地方からの搬入品である可能性が高い。その他の4点は2～3個体分の破片と考えられ、本遺跡では最低3個体の手焙形土器が存在したことになる。搬入された背景とそのルートのは明は今後の課題である。</p>
----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

長野市の埋蔵文化財 第160集

浅川扇状地遺跡群

吉田四ツ屋遺跡（2）

令和3年3月4日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 大日本法令印刷株式会社